川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十四年八月二十五日　印刷
昭和四十四年九月一日発行　（毎月一日発行）
（第四十八号）

No. 48

九月号

明日のために
今日ものむ
ポポンS

シオノギ製薬

仲代達矢

国立公園 奥新和歌浦
・雑賀崎

国際観光旅館

うおまたろ
魚又楼

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3564

風光明媚な
海岸美を
誇る

枯れてから又蓑虫の役に立ち

箒目に一条松葉掃きのこり

どないでも書きまっせと領収書

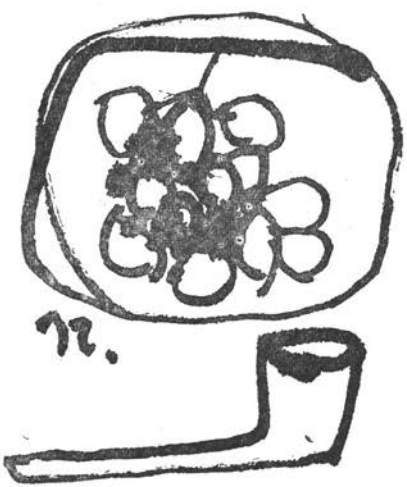
フランス語で言うさよならで振られて来

すれすれの次点で大物らしく落ち

中島生々庵

今月のことば

七月七日の路郎忌。酷しい暑さだったが本年も賑かな句会になった。私の隣に東野大八氏向うに石原青竜刀氏と珍客の顔も見える。青竜刀氏とは二回目の邂逅である。その青竜刀氏に不思議な事を発見した。細い活字の柳誌を眼鏡なしに読みふけっているのである。私よりたじか年長と思ってるのに寔に奇異な感じ。句会後大八氏も一緒に一献酌む席で眼鏡なしの件にふれ老人のくせにちと生意気なる口が辷った。青竜刀氏曰くそんなとこに生意気などと言うものでない。言葉はよく考えて用うべきだと嗜まれた。私の生意気というのは幼稚園の孫が老眼鏡を鼻先にぶらさげてふざける様子と同義に解してのこと、きざなとかなまじかに意気がると言うのではない。しかし青竜刀氏にとっては眼鏡なしが殊更不自由ではない特殊な肉躰的強壮である。それを私が奇異に受取っただけである。主観とか客観とか句を作る上だけでなく日常生活の中にも心得なくてはならぬ大切な要素がある。



川柳塔九月号

川柳塔九月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……中島生々庵…(1)
川柳塔…(同人作品)……中島生々庵選…(4)
川柳忌……北川春巣…(2)
川柳日記……麻生葭乃…(27)
川傍柳初篇研究…(七十五)……(20)
前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄
川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫
川柳徳川記…(七)……富士野鞍馬…(28)
秀句鑑賞……清水白柳…(24)
一筆啓上……正本水客…(27)
川柳の中の多彩な絵……馬場博治…(41)
文楽と路郎忌句会……東野大八…(22)

私論・柳論

川柳忌

木枯や跡で芽をふけ川柳

この九月二十三日は、初代川柳の第一七九回目の祥月命日である。川柳と号した人は二代目も三代目も四代目も……おり、単に川柳忌といえば誰のことか分らずまた狂句の方では鯛屋貞柳を柳翁と呼んでいるので、柳翁忌といえばこれと混同する恐れがある。従って我々の川柳忌は、少し長たらしくなるが、初代川柳忌というのが正しいのである。

さて、前記の句は初代川柳の辞世の句であるが、それでは何故、九月二十三日に死んだ人が「木枯」などという冬の季語を辞世の句に使ったのか、と不審に思う向きもあると思う。が九月二十三日といっても、これは旧暦であって、これをそのまま新暦に踏襲したに過ぎない。気候的には新暦の十一月

川柳七草……（42）
戸田古方・谷沢好祐・清水白柳・吉田水車
阿万万的・本多柳志・不二田一三夫

趣味を越えている……森下　冬青…（40）
井上旭峯氏逝く……臼井　三林坊…（59）
近作柳樽……菊沢小松園選…（30）
初歩教室……本田恵二朗…（50）
大萬川柳「午後」……清水白柳選…（52）
★柳界展望……（薫風）…（54）
★本社八月句会……（庸佑）…（56）
★各地柳壇……（文秋）…（60）
「親切」……原独仙選…（48）
一路集「家」……野呂鵜汀選…（48）
「宣伝」……浜田久米雄選…（49）
★編集後記……（一三夫）…（64）

下旬になるのである。さすれば木枯が吹き荒れてもあながち不自然ではない。我々川柳作家は、俳人と違い季節感にはもうひとつ敏感でない所があるが、これも心すべきことであると思う。

では、毎年めぐり来る初代川柳忌を、やかましくいって修するのは何故か、これも考えてみたい。初代川柳はいうまでもなく我々のやっている「川柳」の元祖である。彼の選をした「万句合」の中から「柳多留」が編集され、それが明治後期に、川柳のバイブルとして「新川柳」勃興の糸口になり現在まで続いているのだ。現代は何といっても初代川柳の時代とは違う。世の中の事物、現象はもちろん、ことばすら変って、意味の通じないものさえある。しかし句の底流の人情はあまり変ってはいまい。

我々は忌を修することにより、初代川柳を思い出し、これを機会にその精神をこそ学び取らねばならないのである。

（北川春巣）

川柳塔

中島生々庵選

高槻市　傍島静馬

人生薄暮無性に人に会いたき日
今日のこと今日にすまして飲むビール
黙ってたらどこに居るがとも云わず
おしゃべりに手許がにぶる溝掃除
隣りクーラー向いカラーで攻めてくる

大阪市　大坂形水

ライバルをほめて自信をほのめかす
もらい手のない古自転車の置き所
造花かも知れぬ花びら触って見
怪獣が出ぬ月面でものたりぬ
アポロアワー空に半月知らぬ顔

大阪市　正本水客

今日からは秒針のない暮しせん
親バカになるまいとして口つぐむ
どの子からも電話かからぬ日が暑し
黙否権金魚の動き追うてる眼
冷凍やろと妻の料理を馬鹿にする

竹原市　小島蘭幸

その鼻が折れ一段と美しし
金貸してやってみじめな思いする
すれ違いざまに好きだと言うたろか
握りこぶし返す言葉もないままに
笑ろてみたとてひとりぼっちに変わりなし

熊本県　有働芳仙

アルバイトする娘の客になってやり
落成式明日に控えて雨が洩り
傷心の酒独り酌む雲の峰

骨壺の中に隠そうかと思い
恋人へパッタリ会った空財布

兵庫県　遠山可住

特別の願い裏から拝んどく
まださわらへんのに歯医者いたがられ
寝転ろんでみて百畳はありまんな
栄転は人のみにくさ置いてゆき
八十年いま石ころを撫でている

伊丹市　小川静観堂

亡妻への便り（二句）

お見舞のほかにもっとたべさせたかったメロン
天国に5DKぐらい借りて置け
風呂の穴へ逃がした石鹸つかまらず
お酌など妻へ頼んでひきさがり
来年は中古宇宙船で天の川

高槻市　若柳潮花

ぼろぼろの体へつぎを当てて生き
腰紐でくくられたまま猫昼寝
結局は金へころがるようにゆき
稽古場の噂に負けてひとりやめ
君の居た頃とはちがう月の色

明石市　阿万万的

尼僧しずかに作法通りに茶をすすめ
雨にぬれた瓦の艶も京のもの
下駄で行く女が京に絵をそえる
日本画にまとめて庭を見せる位置
芸術の弥次馬として京が好き

奈良市　村上春巳

枝豆を出されて夏を嬉しがり
よっしゃよっしゃと踏台になっている
長梅雨に鹿あきらめて濡れている
ワンダフル塔よし鹿よし蛇の目傘
アポロゆく月がきれいな三笠山

香川県　三井酔夢

修善寺

名作を生んだ湯の街濡れながら

下田

浜木綿はお吉の憂い語るかに

河口湖

旅人は展望台の湯に通い

富士スパルランド

五合目の騒々しさが気に入らず

丸子の宿

弥次喜多のすすったとろろうまいこと

守口市　羽原静歩

老いの坂猫背となって急ぐだけ
回転の木馬となって暮れかかり
再会の義肢ふんばってふんばって
ひしめいてベースアップの顔ばかり
手も足も出ないコケシになっていた

岡山県　浜田久米雄

また盆がひとつふえてる内祝
お上手が言えないままに老けてゆき
おべんちゃら口に出てくるのを押さえ
グラス酌ぎ足してしばらく句を案じ
わが道へ歩ける幸をかみしめる

大阪市　木村水洞

全集になれば愚作も加えられ
家出までして結ばれて倦怠期
落ちついて古都の雀は餌をあさり
長屋からミニで出かけるデイトの日

後村上天皇桧尾陵

宮内庁衛士一人の静寂さ

愛媛県　村上旭童

とも角も田植えの済んだ昼の酒
雑魚ばかり釣ってきれいな竿のつや
ながい長い梅雨も終りという豪雨
暖冬のつぎは冷夏とややこしい
こんな日が照るぞと梅雨晴れて見せ

倉敷市　本田恵二朗

交通禍見たあれからの右左
汐風にあばらの数を数えられ
日曜大工仮面を脱いだ顔である
大ジョッキ街の夜景をぐっと飲む
臍曲り或る夜しみじみ臍を見る

倉敷市　木村千容

老い足のロボットめきて笑われる
八十三なお人生の春のあり
年金をあてに長生した見たい
大る湯の中なるちさい渦
ひまわりの陽に背きおり長梅雨の

東大阪市　久米奈良子

雨漏りに男手のいる不甲斐なさ
女の直感へ男さりげなく
信号をひとり渡って夜寂し
母在ます倖せ恋を遠ざけて
おもわくへ申訳けなし恋でなし

出雲市　尼緑之助

言い張って即ちそこが嫁姑
姑なる意識女なるかな声となり
ごねどくの味方に労働法があり
平等を頭ごなしに吠えつかれ
団交の理屈はねかえさんとする煙草

堺市　新谷笑痴

ハンドルへ無事誓わす児の寝顔
人生がそれから変えた待ちぼうけ
橋筋は人の流れを肩で切り
つぶやきと吹殻一緒に丸められ
仕かけねばならない罠に泣く女

名古屋市　吉田水車

路郎忌（三句）

み仏は苦難のひとと思われず
せっかちに道をゆずって朝の駅
仕立おろし能を舞うかと思われる

乗鞍より遠望（二句）

ありがたや槍も穂高も晴れ渡り
あじさいよお前も孤独楽しむか

大阪市　橘高薫風

鼻先を春の蚊が飛ぶ白昼夢
逢いに行く心の中の首飾り

二人して手錠の形（なり）の花咲かす
額の裸婦と同じポーズで夢を見ている
金魚すくいの網のごとしか敗北は

大阪市　不二田一三夫

乳牛に似てもりもりとよく食べる
嵐呼ぶ男に金のないうらみ

秋田実先生一行と琵琶湖半周

湖上ドライブアポロの月を砕く波

寄席（二句）

絵にならぬあわれは高座はねまわり
大阪の客は談志に踊らない

堺市　高橋千万子

帯といてぬぐまで待てぬ扇風機
負けた事ツキがないとは身勝手な
矢印の終点笑顔まってくれ
タクシーで送ってバスで帰る母

広島県　高橋鬼焼

とぼとぼと歩けば炎天のしかかり
不自由な足にもなれて松葉杖
うつむいて歩けば影にはげまされ
反省をさせるき妻のまだ無口

倉敷市　水粉千翁

信じたいことあり雨の音を聞く
丸出しの酔うた素顔が美しい
雨垂れの落ちねばならぬとき光り
褪せてよしめおと茶碗に惜しむ色

平田市　久家代仕男

清貧と陳腐に妻は馴れんとし
こけそうな鶏舎で只今生んだ声
漂々と岩場を渡る竿楽し
執念が限界説を吹っ飛ばし

今治市　越智一水

ふた取れば心がなじむすずり箱
民主々義投書箱から教えられ
父逝って田へ草はやさぬ意地をもち
天と地をあい手に百姓つつがなし

熊本市　楠田ひで子

脱線のない青春に悔多く
あたためる想い出を追う雨降る日
感激を娘に純情ねといわれ
初恋のかすみのようでなつかしく

大阪市　山川阿茶

静と動まず七三と云うくらし

市来女史開院

待望の城におさまるうれしい日

梅里さんの二年祭

奥さんと筆まめだったを話し合い
義理にきく小唄は終りまできかず

岡山県　直原七面山

愛確か女後から従いて来る
三面鏡の中の私でない私
身に余る信頼感へ裏切れず
死産とも知らず保険屋訪ねて来

大阪市　西出一栄

路郎忌に旅人偲ぶ雨の宵
良縁と思えど易に腐される
デイト今日アクセサリーに持つ聖書
差しのべた掌に雨垂れの邪けんなり

大阪市　酒田清子

院長回診慌てて拭いたり着替えたり
コンピューター時代来るとは味気なし
情熱の枯れた時樹氷のようになりたい
雨の日は電話で孫の歌を聞き

室戸市　奴田原紅雨

あの道もこの道もない全部禿げ
人形に心を入れる便り書く

口ひげを生やし男の座を探ぐり
酒のある秋三太郎がいない

諫早市　川岡霊眼子

私の還暦（二句）

還暦に妻もチョッピリ酔うてくれ
還暦を祝い還暦忘れたし

柳友の死

みじろかず通夜経の灯のゆれるまま

水害忌

水害忌街つつましく祈りもつ

鳥取市　河村日満

招かざる客ふるさとへ来た右翼
恐いもの見たさ右翼を遠く巻き
来賓受付け関所を通るほど調べ
国道に苗落ちており田青し

笠岡市　出原真奇

言葉尻とられそうなで止めにする
子供等に祝われ銀婚てれている
新入りへ兄貴の方が気をつかい
本人も頑固だことは知って居る

大阪市　福井野迷路

田植えする勿体なくも豚の餌
解放へ忘却の功徳有難く
良心はなし神経は持ってます
阿呆には自分以外も阿呆に見え

美祢市　安平次弘道

資本家の姿鵜匠の綱さばき
嘘に嘘重ねて傷口広くする
ひょろひょろと伸びてもやしはよしとされ
どん底はどん底なりの見栄があり

鳥取市　森本法泉子

ゲバ棒の記事はとばして読むとする
路上駐車うちの入口どこかいな
叙位叙勲借金だけが残ってい
盆栽の思うところに枝が出ず

松江市　小林孤呂二

一族を支えビールを酌がれる夜
雨蛙雨を呼ぶよな眼でござる
茶をいれてからの陳情和むなり
上様でくる勘定は待たされる

大阪市　室谷鉄舟

もれる灯に団らんがある一軒家
無い袖は振れんと債務者威張ってる
わきすぎた風呂を湯殿でもて余し

事なかれ主義で明治の義母哀れ

大阪市　横倉富久一

マイホーム縁無く遠き墓地を買う
過密都に無縁仏は肩を寄せ
いつ見ても同じおもちゃへ子等の知恵
回顧録自慢と説教調で売れ

京都府　大鶴喜由

ぬいぐるみのペットの顔が彼に似て
食いはずしのない方の人母すすめ
あきないも恋も納得させる術
今にして思うつなぎの恋だった

出雲市　原独仙

赤銅の肌紫外線はね返えし
狸寝で聞いた噂を持ち歩き
肌脱げば孫不思議がる灸のあと
発情もせず老猫のねむりこけ

大阪市　宮尾あいき

空地ではもったいないと草がはえ
アスハルト草すみっこへ追いやられ
高層建築長屋の陽を奪い
念入りに塗ったお顔で水着着る

豊中市　和田一乃字

灯を消して涙は出るにまかしとく
お迎火本当に父が来てほしい
膝に手を置いてこの金借るべきか
迷い子が見つかりお辞儀するばかり

米子市　八木千代

ライバルの善意に胸を洗われる
打ち明けてくれた十字架ともに負い
ふすま半分閉めてひとりの城つくる
長距離で娘が味付け聞いてくる

小松市　四方天弘美

政治屋の娘票田に嫁がされ
奢らせた積りチップ迄割がくる
デパートでお玉杓子に手足が出
世知辛い世で神様も出店持つ

岸和田市　内藤きさ子

モーニング植樹の土をよけそこね
嫁きそびれ父にやさしき娘なりけり
梅雨しとど反省室に誰か居る
あじさいは少年の瞳を見つめ咲く

大阪市　本多柳志

小唄習う度胸もあって出世せず
一と握り程の善意が記事になり
帯に無理たすきに無理な展示会

画展

鼻に自負あって自画像横を向き
豊中市　戸田古方

わからへんこというてたマイクとヘルメット
梅雨明けへえらい自信のお天気図
ひとり旅その味無言まだ続き
コンピューターそやけど勘がようあたり
倉敷市　野田素身郎

幸福な恋とはみえぬ終電車
さめかけた恋水虫がかゆくなり
初恋の人に墓参の道で遇い
半分にしてもうらやましい話
京都市　都倉求芽

山の湯へ月出るものと決めている
そば処 処どころのだし自慢
雲海を小舟のようにバスが揺れ
開店花輪毎日雨が潰しに来
東大阪市　竹中綾女

好々爺親分だった跡見えず
新築のもう雨洩りで騒ぐ梅雨
祭の出店なつかしいのはへるばかり
綿菓子の溶ける様見て夢を追う
倉敷市　小幡里風

プラモデル宇宙へいどむ男の子
冷静に仮面かぶって妬いている
この山が一つ消される青写真
山なみへ挑む風船の気儘
島根県　藤井明朗

珍客へはえ一匹が落ちつけず
旅づかれ財布もどっと投げ出され
熱帯魚応接室で女王めき
人様の癌だから軽々しく言われる
ハワイ　羽佐間柳葉

母の日の持てなし娘等の知恵がより
余興から下級存在認められ
金が出来貧乏した日を自慢する
年寄の愚痴は路傍の石にされ
鳥取市　藤本礎山

事業より趣味で名が売れ顔が売れ
そう言えば妻もむかしは伊勢小町
愛すればこそと好物食べさせず
耐える外なし一心に薬飲む
桜井市　岩本雀踊子

不平チトのぞかせてみた言葉じり
他人様に負ける強さがほしいなり
野仏に餅さしあげる村祭り
職をつぐ他人の子供をほめてみた

大阪市　天正千梢

領域を犯してほしい鍵あずけ
権力をのろい底辺卑屈なり
息は巣立ち夫へもどる愛
よりもどす話へうどんあつすぎる

大阪市　児島与呂志

末っ子は末っ子なりの父批判
父を只そこに居る人と思うとり
一人位男の子が居たらと思う夜
母には負ける娘父には強し

大阪市　石倉旅風

一人乗る八階までの孤独感
一二秒じらせておいて開くドア
だしぬけに行って余計によろこばれ
質のいい嘘ならまけておいてやり

富田林市　岩田美代

女丈夫にされて顔貸す破目になり
もの想う男勝りの足組んで
活字でさえあれば読んでいる空虚
慟哭の儀式終って叩くパフ

笠岡市　木山要次

つけ馬の手を借るほどに酔いつぶれ
愛するの余りに花へ花鋏
横しまな恋にも地蔵の目がやさし
喧嘩もし愚痴も並べて差なし

大阪市　中川滋雀

死ぬ日まで働き抜いたを羨やまれ
なつかしのメロデイ妻と合うリズム
戸閉りを自問自答して留守居
肝じんなとこがコピーのぼやけてる

神戸市　仲どんたく

肩書と肩書でする初対面

浜名湖行

雑学をガイドに学ぶバスの旅
弁天さんやらずの雨を降らさはり

中田島砂丘にて

海はるか詩人のポーズで立つ砂丘

下関市　国弘半休門

晩酌のもう座布団を枕にし
一と握りレインペットを見直した
うそのない人生だから孤独なり
公害の黒い雀で悪るびれず

藤井寺市　西いわを

楽しみに一つぐらいな秘密もち
目分量わたしの感は狂わない
忍者出て来そうな高い塀廻り
振向いて梅雨の晴間の虹を見る

下関市　桜川不水

アイロンでもかけてやりたいヒネ胡瓜
茄子の出来押すなおすなにもこまり
生きるもの滅ぶもの地球は休まない
プロフィール見えかくれする低い鼻

大阪市　金井文秋

大資本投下の波におぼれそう
定年へ解放感が先きにたち
白髪そのままに写ったら気に入らず

日光の旅

先見の明が育った杉並木

京都市　松川杜的

山陰の旅に（二句）

残酷にも思えて海女の演技見る
眼鏡岩視野の丸さにある緑

長命寺巡拝（二句）

一息を入れよと琵琶湖の水の青
霊泉の水面をゆうゆう水すまし

竹原市　山内静水

善光寺二度目生きてた掌を合せ
食膳にのる湯田中の鯉が跳ね
草津節音痴も高原バス走る
五泊六日二人になれた京の街

門真市　福島鉄児

歯車の狂うたような夫婦です
久しぶり靴を磨けば雨に逢い
何処へ行く蝶か御堂筋の午後
勤務地に馴れて左遷の傷も癒え

岡山県　池田古心

鈍感の自嘲あの日あの場所あの折りに
読経僧若過ぎ成仏不安なる
藁屋根の下にも文化応接間
どう考えてみても成るようにしか成らず

ハワイ　羽佐間柳葉

長病の疲れ迷信にも頼り
成功談裸一貫から初め
老い哀れ前歴伏せて養老院
商才は買わぬ客にも笑顔見せ

青森市　工藤甲吉

愛するが故に首輪を犬にはめ
サボテンのトゲはするどく世を怒り
逆立ちで逆さまの世に合わせるか
マゲ切って土俵の鬼は人となる

ハワイ　上田紅溪

欲張った大きな柿は渋かった
役に立つ人になろうと自我を捨て

ピクニック帰りや葬式待って居り
百までは生きられますと太い声
倉吉市　奥谷弘朗

大山を我が庭にして男生き
愚夫愚妻だから喧嘩もして続き
絶好のチャンスも譲るお人好し
黙ってる方が無難とする弱身
大阪市　水谷竹荘

長生きをしてねと久し振り別れ
旅なれて鈍行で飲む二合瓶
食卓へもう夏が来たひややっこ
病院の昼寝は静養中という
鳥取県　谷無閑

湯上りを待ちかねている碁の仇
終点の夜道二人宛二人宛
もらい風呂湯気のたたない湯につかり
日溜りの女患便りを出して読み
米子市　林瑞枝

親の見栄捨てて次男の意志通す
人口十万と云う理想の都市に住み
茶道具展わがへそくりの多寡が知れ
作風を愛しまだ見ぬ師を慕い
笠岡市　松本忠三

線香に酔った藪蚊のとどめさし
押売りへお茶をどうぞと女事務
マッサージ出張旅費に書き込めず
岡山県　田村藤波

子が逝ってから地蔵さんへ掌を合せ
ご器用な人よと褒めて使われる
虫すだく厨に夫呼ぶ低い声
鹿児島市　土岐トク子

脊信に泣く銀婚式の年も暮れ
主婦業に愛の尺度も狂い出し
長髪とミニ軽やかに夏を行く
鳥取県　森田布堂

電報の声に動かぬ碁を囲み
ゲバ棒の父はそのかみ銃を執り
めぐる忌に伸びる柳のおとろえず
岡山県　大森娯句楽

廃校が牛舎に変る過疎地域
上役の子の腕白が目に余り
洪水で水神祭り止めとなり
兵庫県　河原みのる

海水着お灸知らない娘のそだち
米価据置き（一句）
神かけてただ凶作を祈るのみ

パンミルク農家の長男ご出勤

倉敷市　藤井春日

気骨ある社員はスカウトされて去き
若ぼんは家のしにせを低当に入れ
塩まいて嫌な貰いへ顔を出し

鳥取県　清水一保

何気なく降って五月雨慈雨にされ
肩書を外して二次会飲み直し
故郷へ続いて欲しい虹の橋

高石市　谷沢好祐

編針が動いて受付嬢は閑
一浪へ人事を尽せだけが言え
デパートで判ったカブト虫の価値

笠岡市　木山遠二

齢ゆえに坐る淋しい床柱
干支で云うマダム十二も若く見え
正直をおそれ秘密を打明けず

奈良県　西辻竹青

職場結婚急に会社がせまくなり
親の恩も返さず独身つづけてる
文化のヒニク公害をつくり出し

宇部市　平田実男

10分の見合で六十年を添い
おやつより鍵っ子ママがいて欲しい
どわすれと云うて自分の無知を逃げ

和歌山県　西尾公作

地下街の流れに出口見失ない
口紅を濃くしてうそが言い易し
三十年妻といっしょに呆けはじめ

八尾市　高杉鬼遊

また来てね雨の舗道へほり出され
ゴミ屑の丘とも知らず草が萠え
加賀太鼓旅の余情を響かせる

兵庫県　磯野与志

病窓春秋

耐ゆる外なし病室一パイの西日かな
病棟のさえぎり花火音ばかり
ふともらす医師の言葉の気にかかり

奈良市　宮口笛生

盆栽を又ふやしたり老の暇
計算に入れてなかった日の出費
繋がれてねむるほかなし昼の犬

枚方市　宮川珠突

逆ろうてくれる人あり拗ねている
母ある日ぼくの女神を魔女と呼び
険しい日増えて飯場へ降りつづき

弟の浮気に兄貴も監視され
八十を生きて自嘲の高笑
ビッコでも二人三脚夫婦旅

大阪市　川口弘生

ながの雨に西瓜忘れた季節感
月ニュース聞ける寿命に感謝をし
戎橋湯衣ネオンの灯に染まり

大阪市　宮地双楽

梅雨晴に古くともよい麦藁帽
あごひげはもう飲けるやくざ振り
バラ鮓の盛りを見分ける程に癒え

泉佐野市　大工睦夫

昼さした日傘を夜の雨にさし
汗の手で今日の稼ぎを握りしめ
定退後四年で職を四たび変え

東大阪市　竹中肖二

酔わしてと女は業に燃えている
よろめいてああ歯車が一つ欠げ
働いて死んださらさら悔もなく

倉敷市　臼井三林坊

女性上位あえて男性逆らわず
観光バス居睡しながら回遊し

出雲市　弘津柳慶

タレントがとちってカメラあわてたり

大阪市　河井庸佑

税務署はそのニュアンスを見逃がさず
繁華街朝からぶらつくひまな人
それほどにこたえていないあほらしさ

姫路市　隠岐不酔

鏡見て声をかけたい母に似る
無心状流石にうまい子をほめる
鈍行も楽しみがあり客変る

高槻市　福田丁路

ぼろくそに云われて恥じぬど根性

南紀霊場那智山にて

那智の山震わす滝へ手を合せ

南紀名勝鬼ケ城にて

潮騒いに身の毛もよだつ鬼ケ城

岡山県　横山一声

自家用車買えば保険屋がねばり
恵みの雨三日続いていやがられ
あんま機を買うて孝行したつもり

大阪市　今西章雅

油虫なめくじ家の古さ知れ
始めから寄附当てにして組むプラン
利廻りでダウに迷わず買った株

恋の字をうらんでうらんで死んだ友　松江市　柳楽鶴丸

運命とあきらめている妻いじらしい
とうちゃん頑張ってと子の声妻の声　西宮市　野呂鵜汀

信用と言う財産は持って死に
現代娘舌出すだけのはずかしさ
山里は昼うぐいすと鮎の膳　松江市　中川晃男

耳打ちへ承知した目が席を立ち
さんらんと向日葵孤高の影保ち
天災は忘れず日本をしごきに来　高槻市　山田季賛

日程を狂わす梅雨の雨つづく
老眼鏡買えと子供に笑われる
一匹の蚊が宿直のじゃまをする　玉野市　小谷仙山

千円であれもこれもと子が迷い
恐ろしい百足の方が逃げ回り
痛いから痛いと言って笑われる　愛媛県　渡辺暁童

赤いシャツ財布なんかは持たぬらし
矢立取り出しサラサラと書けません

無理をして建てたを世間様笑い（新築）　西宮市　島居百酒

女将には汚職議員もご前様
欠陥車欠陥者用の道がいり
制札があって見事な芝の庭　久留米市　永松道雄

下積みの強い組織が盛り上り
一目にて苦労に喘ぐ児を見つけ
ふり出しへ戻る貯蓄の家が建ち　和歌山市　野村太茂津

枇杷の臍いちいち眺め食べ了り
冷房に飛び込み挨拶やり直し
期待した答返らず口閉じる　和歌山市　垂井葵水

清貧を誇り悔なき主張する
郷愁ふと流れる雲が目を捉う
逆転の飛球ただいま風に乗り　大阪市　西川誓二

梅雨時に晴間があって妻多忙
ひき止める手だても尽きて母帰し
喘ぎつつ齢重ねて老いの坂　兵庫県　大江秋月

四十妻連れた旅行は世帯じみ

朝寝坊せよと日曜雨りが降り
故郷の空気にふれた墓参り
岸和田市　葛城伊三郎

壁の方向いて女は裾揃え
薄命を知ってか蟬の啼き続く
肌半分見せて女は夏に生き
芦屋市　丸川初甫

蚊を叩く音へ長尻腰を上げ
ベストつくして天命を待つ酸素
停年のそれから趣味に遠くなり
松江市　岡崎祥月

設計図たてたが我が家まだ建たず
青空へどこまでつづく飛行雲
生活の意欲一から築く城
松原市　谷垣史好

爽快なほど奥さんに敷かれてる
ぐちっぽい話へビール泡を消し
男三人お好み焼を食う不粋
尼崎市　高津徹也

再会の拭かれる涙拭く涙
視線の余裕都会のセンス持ち合わせ
煤煙のない緑の駅の深呼吸
大阪市　神谷凡九郎

肩よせあってから歌が出てくる
人相見付黒子とは知らなんだ
俺は違うさエリートらしく構えて見
岡山市　川端柳子

愚痴はみな未来にかける夢で消し
ミミズ見る蛙と蛇を見た蛙
お気持がこもって指輪にある重味
大阪市　加藤貞山

鳥取にて
大阪の人と故郷のゴンドラに
この調子またいい事のある予感
加賀市　細呂木魯木

ご利益も銭につながり尚悩み
漫才に阿呆と云われ手を叩き
和歌山市　土谷城石

共に持つ過去を流して添うたけど
今日限り流れますよと念押され
八尾市　古川鶴声

遺影今我れを呼んだように見え
茂げるだけ茂げらせて刈る沼の葭
堺市　藤井一二三

生き辞引重宝されて古い椅子
先立つものが乏しく寿命もてあまし

石川県　馬場魚山

過疎の町と知ってか墓地に啼くからす
親しみはもてず孤独で押し通し

堺市　伏見茂美

たけくらべによう似た恋もした昔
義理故に誓った愛へ男泣き

★

菊沢小松園

こなごなになっても香水瓶なお匂う
触れば落ちん風情に遠く先に寝る
小火ですみ不足らしい顔で散り
だまされて見たい妓に逢う法善寺
ゆきずりの恋を温め法善寺

清水白柳

梅干でお茶のむ午後の風涼し
ガードレール分校まではつづいてず
庶民との断絶長者番付の数字

路郎忌に

金色の浄土をのぞむ妻の愚よ

川村好郎

離婚したいきさつ知らぬ振りで聞く
男心知って諾否を口にせず
芸もなく飲まぬ主客をもて余し
雲走る誰も知らない涙拭く

備前川柳社

柳縁はいいなと思う夜が更け

西尾栞

路郎忌や美濃の大八備後の亜鈍
ビール罎の露のままなる酌うれし
昼寝場所いつしかきまる風の筋
灸すえに行く人と話合わせとき
掌に金魚の屍秋に入る

北川春巣

会議また会議居眠る芸もでき
付添は茶を汲むだけで病よし
全治退院わが足ながら重いこと
散歩さす犬も女を振返り

岳父初盆

迎え火に極楽じっとしておれず

若本多久志

結論を急げジョッキがぬるうなる
傷ましやミニスカートの座りだこ
体験でさとす社長は明治なり
夢に出た女の顔に覚えなし
さりながら月煌々としてもの想う

川傍柳初篇研究（七十五）

前田喜代人　川端柳風
岡崎重義　故高須唖三味
清博美丸　十府
藤井和雄　岡田甫

575　そろ〳〵引に生酔を涼台　泉河

清＝死んだようになって寝ている酔っぱらい。これを涼み台に運ぶわけだが、目をさまされては、また迷惑をする。そこでそろそろと静かに運ぶことになる。

川端＝涼み台で眠ってしまった生酔であろう。夜も更けてきたが、一向に起きる気配もないので、落ちないようにそろそろと涼み台ごと家の方に運んでいる状態と思う。

高須＝「ほろ蚊やを馬鹿々々しいと酔がさめ」（傍一28）「生酔はぶち殺されたように寝る」（傍一34）など既出の句があるように、涼み台へ酔ってしまった酔漢に、長屋中の思いやり。「そろそろ引き」が山車を曳くようで、案外皆の衆たのしんでいるのであろう。

丸・岡田＝川端・高須説賛。

576　合紙のしこたまあまるやり放し　門柳

清＝不明。

藤井＝合紙は広辞苑によると間紙で、物の間にはさむ紙とある。内容物のいたまぬためにはさみこむ紙だろう。箱の内から器物を取り出し、また改めて格納するときに、一つ一つ前の通りに間紙を入れないと、紙が余ってしまう。従って、やり放しのいいかげんの手合では、しこたま余るわけ。

丸＝賛。「間紙をしてたまあまし叱られる（三〇）。

岡田＝賛。

577　勅答がすむと太鼓（たいこ）を廻す也　桝水

清＝不解。

藤井＝菅原道真死して雷となり内裏に落雷すること数知れず、天皇恐れて天満天神と贈宮されたので「菅函相うれしや生きてて恨み、死しての悦び、是までと黒雲に打乗って、虚空にあがらせ給ひけり」と謡曲雷電にある事件ではなかろうか。即ち天満天神の勅答を得たとたん、雷雨一過を太鼓を廻すなりといったのであろう。

高須＝「勅答」という言葉は、天皇から何か聞かれて、それに答えるという言葉だがサテ、この場合何であろうか。思いあたらぬ。

丸＝解せず。太鼓を廻すは、ふれ太鼓のようなものか、太鼓を廻転させるのか、何とも見当がつかない。明八梅1に「勅答が済むと傘みんな干し」の句があり、これは藤井氏の「雷電」説に関係があるかとも思われるが明解を得ない。ともかく両句同じ事を詠んだものと思われる。

岡田＝「勅答」は変だが、藤井氏の叩説以外には考えられない。叩明解、敬服。

578　昼三の一ト足よじるにわたずミ

清＝昼三（ちゅう三）という下等女郎だから、水溜りをよけるにも、品がなくただ一足よじるだけ。

藤井＝昼三の句に、

昼三を買ったが鼻へぶらさがり　一〇・10
昼三を買かゝったがりんがなり　八・8
昼三は甲の座にいて売れ残り　一九・23
昼三は残って恥にならぬもの　二二・27

のように安女郎ではない。広辞苑には昼夜三分の安女郎と書いてあるが、三分とは大金だから上妓と思う。昼三を昼夜三分もおかしい。昼三は昼だけで三分の上妓のことの誤りだと思う。従って清説とは反対に、品がなく一足よじるのでなく、品よく一足よじって水溜りを……それも一寸した水溜りを……越したと解している。女らしいつつましさを強調した身体のしぐさ、さすがにオイランだとの讃辞と見たい。

川端＝藤井説賛。昼三の太夫で女郎中では最高位、昼夜とも三分で一日の揚代は一両二分、次が三分の女郎で昼夜で三分となる太夫にまさる全盛を極めたほどだから「一足よじる」は品をつけていると解したい。

高須＝昼三は昼夜三分で（昼夜とも三分、昼夜各三分ということ）吉原で最高の遊女だから「にわたずみ」（潦と書いて雨が降って地上に溜まり流れる水、俗にいう水溜り）をよけるにも、品よく一足よじるだけだという句。

岡崎＝藤井説以下の諸説に賛。オイラン道中の八文字の要領で――あるいはオイラン道中の描写ともとれる。

丸＝同。おいらん道中の一情景。

岡田＝諸説につきる。

579　**四五文が花火暮るを待かねる**　亀遊

清＝たとえ安っぽい花火でも、早く火をつけてみたいのが人情。

花火を貰ひ日が暮れろ〳〵　一七・44

高須＝両国の花火などは、昼間からポンポンあがるが、四五文のオモチャ花火では、日が暮れなければ全然おもしろくない。「暮れるを待ちかねる」とは、そのことであるが売る方はそうはゆかぬ。現代句にこんなのがある。

客あろが無かろが花火あげてる　炭車

岡崎＝賛。子供心。

丸＝花火を四五文買ってもらった子供。

岡田＝同。

580　**郭公時〳〵羽根を出して飛ひ**　眠狐

清＝不明。

藤井＝「ほととぎす鳴きつる方を眺むればただ有明の月ぞのこれる」で、ほととぎすは声だけで、なかなか姿を見せぬもの。従って運よく見た時の気持ちを「時々羽根を出して飛ぶ、やはり郭公だな」と感心したところか。

八文字が七文字になる潦

川端　賛。菅公・後徳大寺・千代女などが歌や句によんでいるように、ほととぎすの声だけでもなかなか聞けない。まして姿を見ることは稀であるので、雲の上にいない時は羽根でとんでいると洒落れたのである。

高須＝ホトトギスを神秘な鳥と思っていた江戸時代には「鳥だから羽根」のある原則を忘れて、ホトトギスはジェット機のように空を飛ぶと考えていたらしい。だからあれがホトトギスさと言われて見た鳥は「羽根で飛んでいた」という当然のことに驚ろきを発見した句と思う。ただ羽根を出してが一寸ひっかかる。現代なら

ホトトギスやっぱり羽根でとんでいるというところだが――。

前田＝「時鳥月をかすってないて行き」（二四34）の句とともに写生の佳作で、そのまま素直にうけいれられる。

岡崎＝賛。ホトトギスは文字通り一文字に飛ぶ――という概念が一般的。しかしそれも気流にのっているからであって（見たことはないが）当然羽根で飛翔力をつけねばならぬ場合もあるはずだ。

丸＝賛。写生句。全く同想の句（或は類似句か）「時鳥ときたま羽を出して飛び」（天五宝1）

岡田＝賛。スピードをつけたあと、エンジンを切っても自動車が走ってるようなもの。

文楽と路郎忌句会

東野大八

神戸の〝ふあうすと〟創立四十周年記念大会の懇談会の席で、清水白柳さんと隣り合わせで飲むうち、あす七月七日は路郎忌だな、神戸まできていて、それに出なんだら義理がすたる。そう思い定めて勤め先の仕事の手順を考えているうち、なんとかできそうな気がしてきた。その矢先、座のはすかいに菊沢小松園さんのお顔がみえた。瞬間よしきめた、路郎忌には出るんだ、とハラを定めた。

橘高薫風さんの経営されている立花屋へ、かくして直行、二泊という仕儀と相成ったのは、こういう胸算用の結果からである。石原青竜刀さんも、あとできけば文句なく路郎忌は出る心づもりでの西下ともわかった。

路郎忌は、七月七日午後六時開会。いわゆるナイターである。前夜、ふあうすと大会のくずれでくり込んできた沢山の柳人たちと、夜半すぎまで柳談で過したので、当日の朝はゆっくり寝かせて貰ったが、やはり夕方までたっぷり半日ほどのゆとりがある。青竜刀さんが、道頓堀や心斉橋を歩いてみるか、との発案に同意して、昼ごろ宿を出た。道頓堀には、水府さんと当百さんの句碑があるので、青竜刀さんはそれもついでにみたいらしい。一昨年、大井正夫さんの案内で見て回ったのが、図らずも役に立ったわけだ。

〝頬かむりの中に日本一の顔　水府〟

梅雨空の空の暗さもあってか、そのそばやの柳の下の句碑の、石のくぼみの文字の中は、薄い青苔が絵具を刷いたようである。

しばらくそれをみつめて歩き出していた私の耳に、ふいに太棹の撥の響きが流れた。〝心中天網島〟の舞台で、私の十六、七のころ眼にした、四ツ橋の文楽の思い出である。水府さんの頬かむりの句は、先代鴈治郎の河庄の紙屋治兵衛の、いわば観賞吟である。道楽者の私の父も、この鴈治郎の紙治が大好きで、よくその話をさわり入りで話していたことを思い出す。だが、私の耳に、ふいに文楽の太棹が反能したのは、今度の旅で、神戸に向う前日観賞した、映画「心中天網島」の鮮烈な印象に加え路郎先生の死の直前の句が躍動したからに他ならぬ。

〝死はゆらぐ文楽人形に死はゆらぐ〟
〝死の影が紋十郎の背後から〟

路郎先生の死を私が予見したのは、有名な雲の峰の句より、この二句の方が、私には強烈であった。なぜなら、ここにも路郎先生の最後の映像が私に焼きついて離れないからだ。

「大八君かいな、これから文楽に出かけようと思てたんやが、珍客の君やから、もう行くのんやめるわ」

万代西五のあの先生の部屋で、そういって路郎先生は、大きいベッドの上から勢よく下りてこられた。ネクタイ、背広で、いざこれからという風なのに、これは悪い—と私はそのとき思ったことだが、そのとき宇和川木耳石原青竜刀おふたりを案内してのことだったのだからどうしようもない。今も、先生にあのときはすまんことをしてしもうて、一回分見落しやはった、と悔いられてならんのである。

このように、文楽が路郎先生への思い出に二重、三重にダブついている。頬かむりの句碑の太棹は、そこにあったわけだ。

映画の天網島は、篠田正治の前衛的手法による、人形浄瑠璃の世界を今日的感覚で拡大したもので、中村吉右衛門の治兵衛、岩下志

麻の治兵衛女房おさんと遊女小春の二役。黒子の群のもつ一個ずつの土偶が、次第に生彩を帯びて蠢動し、まるで血の通った俳優たちのように黒い空間に躍動していく。その様を背景としたタイトルのあと、リアルな風景と、前衛文字による象徴的舞台をミックスして、映画は純粋歌舞伎調セリフで、圧倒的の迫力で盛り上っていく。スクリーンせましと木魂する太棹と、男の語り、慓然となる私の心の中で、路郎先生がみじろぎもせずに立っていられる。今思えば、結局、路郎忌への踏切りは、このときについていたのかもしれない。七十の坂を越した青竜刀さんより、若い私の方が疲れて、二度も茶房へ入りこんだのは、しよせん、そうした思念のやりとりに疲れ果ててのことであった。

まあ、ご大層なことのように書いたことだが、こんなわけで、青竜刀さんと私は夕食と酒で会場へ着いた時は定刻の六時五分前。

会場はすでに超満員。顔なじみの不二田一三夫さんとあいさつ、大層喜んで頂いた。岡橋宜介さんの例の人懐っこい顔。柳宏子さん春巣さんの顔も随分とお久しぶりである。薫風さんもすでに遠くの方にみえる。奈良でおあいし、病気見舞の加茂鶴を頂いた梅志さんがみえない。御病気なのである。奥さまに手をひかれて、痛々しい亜鈍さんのお姿には、こちらは胸ふさがれてお話するのも憚かられて、前に坐られた奥様ばかりと言葉を交してお茶を濁す。沢山の同人の方たちが、随分遠くのところから詰めかけていられたわけだが私は特別に挨拶させて頂く光栄に浴した。

「川柳塔は、川柳雑誌の方々ばかりなのでまるで、自分の家へ帰ったような気がした」と私は思いのままを述べた。

終って会場でごぶさたをおわびした中島生々庵さんのお図いで会場前のレストランにいく。薫風さんに、一三夫さんに、多度津の酔夢さんがみえ、こちらは青竜刀さんと私。

「ちがごろの川柳にユーモアがないので、寂しいと思っていたが、図らずも本夕は、そのユーモアの快味を久しぶりに味わせて頂いた」

とは青竜刀さんのくり返しての言葉なのだが生々庵さんと私は、第一回路郎忌以来の対面である。そのころと少しも変ってござらん。適当に毒舌で、適当に川柳塔のハッスルだんぎ。十余年前、この生々庵居で、私は歓迎宴を張って頂いたことがある。このとき名物の「川雑川 柳まつり」が口火を切ったのである。どこかの吟社が、同一出題で全国縦断大会をやっていたことだが、何をかくそうこのアイデアは、路郎先生と生々庵さんのお二人から出たことで、居合せた私も賛意を表したことである。中島生々庵夫人小石さんのお顔がみたかったが、今晩はお留守番だとのこと「帰って彼女とまたちくと一パイ」と生々庵先生、根っから屈托もない。一三夫さんも、これからお勤め帰りの女房をお迎えに、と負けずにおノロケ。この一三夫さん、相変らずひようひようとして奇人ぶりをご披露。青竜刀さん、そんな話に相好をくずし

「あんた、大分、面白い人やねえ」

薫風さんは終始かたわらで湯たんぽみたいにニコニコ。多度津の酔夢さんが女とは愕いたが、柳号通り女平手造酒ほどの酒豪ときいて二度びっくり。ご婦人といえば小谷葉子さんのあで姿に度胆をぬかれたこともつけ加えねばなるまい。

葭乃先生のお姿が、会場に見られなかったのが、この夜の最大の心残りであったが、帰りのタクシーの中の、暗い窓から、天網島のおさんの顔が、葭乃先生のお顔とダブったことは奇妙であった。

近松門左衛門の名作天網島は〝真実とは実と虚との皮膜の間にある〟と論じた近松の虚実皮膜論を具象化したもので、上方歌舞伎の手法をさけ、人形浄瑠璃の世界をそのまま拡大したもの。篠田正治のこの映画のもつ痛烈な風刺性が、結局は路郎先生のこころの文楽の世界に結びついたのであろう。古川柳の句の底から前衛川柳もそうなると開拓の可能性をもつわけで、風刺のプロットは今も昔も寸毫の変りはない。私は宿の床の中でそう思い当ったことである。

秋田実主宰・不二田一三夫編集
「漫才」
定価百円送料六円
十月号発売中
発行所 大阪市生野区勝山通六ノ七九
電話大阪(七一八)三二一八

秀句鑑賞

…前月号から…

清水白柳

ラッシュアワー車掌の靴は光ってた

岸本豊平次

市電がなくなった大阪では車掌といえば国鉄私鉄地下鉄だが、この作者の利用されているのは私鉄と地下鉄で、ラッシュともなればとても足許を見るどころではない。併しこの句のポイントは車掌にある。乗客はスシづめだが車掌室はガラ空き、そこに矛盾を感じてお客の靴は踏まれ次第だが車掌の靴は…と詠んだささやかなる抵抗なのである。

あるゆとり鍵をかけ忘れてしまい

水粉千翁

心にゆとりのない生活は無味乾燥でギシギシと音がしそうだ。そんなときにひょっと訪れた心へのうるおい、本当に得難いひとときなのである。その浮き浮きした感じを作者は鍵をかけ忘れたという句語によって伝達しようとしているのだと思った。

日の丸があるのに赤旗振りまわし

羽佐間柳葉

組合運動というものが赤旗にふりまわされているのではないかと思うのは私だけではないらしい。この句の作者も日本人の組合運動なら何故日の丸でいけないのだろうと素ッ直に疑問を抱いている。赤い旗の意義は知らないわけではない、併し、併しですよ闘牛の牛みたいにいきり立つのは旗が赤いからだと思われないためにも考え直してほしいものだ。

太陽と空気がただでやっと生き

工藤甲吉

アポロ十一号が月着陸に成功して宇宙飛行士が月面で活動するのにあの大きな生命維持器を背負って居らねばならないのに、地球ではハダカで飛びまわることが出来るのだ。このありがたい空気はタダなのである。若しも太陽から日照税をとりに来たり、呼吸税を世界経済の権威者が考えるようになったらどうなるだろう。それこそ水爆で地球を割ってしまう運動が起るかも知れない、血の色の旗を立ててである。

夫婦の対話そう言えば忘れてた

渡辺南奉

枯淡なただずまいを想像させられた。落ついたやりとりのうちに何事も通じあう夫婦というものはそう多くはない、そしてその中の一と言に果たしても果たさなくてもよい世間への義理があったのであろうか。恵まれた夫婦の羨ましい姿である。

眼帯よおまえも眼球恋しから

堀江芳子

御主人の堀江正明さんが松江の日赤病院で左眼の眼球摘出の手術をされた時の作品である。句というものはそのことズバリで成功す

磨かれた伝統の味

御菓子司

鶴屋八幡

本店・大阪市東区今橋5・電話(203)7281
東京店・東京都千代田区麹町2・電話(261)3996
売店・各百貨店のれん街

る場合と、この句のように客観的な立場で見つめる場合とがある。直接的な句はともすれば感情だけが先に立って訴える力が弱いときがあるが、この句は妻として夫への愛情を表にあらわさないで詠まれているが、それがために尚深い余韻をたたえることになったのである。

猫の手も犬の手もないから慌わて

小野克枝

猫の手も借りたい程いそがしいとは昔からの言葉であるが、作者は商品販売店の主婦として店のことから家庭のことまで朝から晩までそれこそ追い廻されて居られるらしい。だから、実感としての句で自分らだけの手では間に合わないのだ。そのいそがしさがよく判る。

かずの子は食べず嫌いの子に育ち

山田止水

黒ダイヤから赤ダイヤ、そして黄色いダイヤと言われたかずの子も終戦後のことである少うしは安くなったと言われても、ピンと来ぬほど縁の無いものになったかずの子は大人の頭からも消えてしまっている。ましてや戦後に育った子にはかずの子などどうでもいいのだ、栄養食品がわんさとあるのだから。気にしない、気にしない。

偽善者のタクトは踊り易き唄

市川鱗魚

巧言令色仁すくなしとか、ついうかうかと甘言に乗せられると、日本製のハクライ生地を買わされる羽目になることが先日も新聞記事になっていたが、おたがいに気をつけたいものである。

満月のヴェール剝がれたとも見えず

根本吐来

美しいものは美しいままで眺めていたいのが日本人の持っているよいところではないだろうか、科学という非情なものに真の姿を見せられても、それはそれとして矢張りかぐや姫の話は語りつがれてゆくであろう。それが人間性を深めることになるのだと思っているのは私だけではないようだ。

煙草一本くすねて二男出勤す

安井寿年

うちのばあさんも中年肥りから痺せるためにと煙草を喫うようになってからもう二十年近くなるが、よく私の煙草を無断借用する。そこらにハイライトが置いてあると私も倅のをくすねることにしている。この句の面白さは二男出勤すというところにある。朝の情景をよく描写して家庭の温かさを感じさせる。

大阪に負けて農家を継ぐという

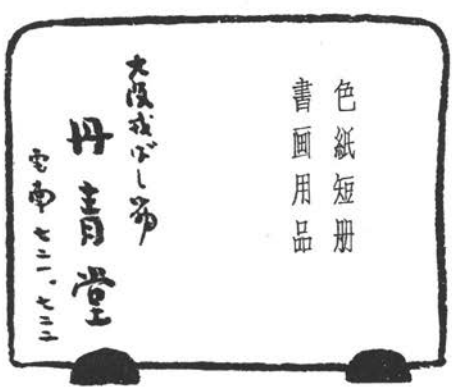
小幡里風

青年志を立てて郷関を出ても、そうどこにでも金儲けのころがっている筈がない。ましてや大阪は何をしても食える処だが、何をしても儲かる処ではない。二度と帰れないようなことをして出て来たのではないとすれば、少しは恥かしくても頭を下げてあやまれば親はそれを願っていたのだから喜んで迎えてくれて目出度し目出度しというところか。

昼　窓を閉めて冷たい人が棲み

本多柳志

めったに窓の開かない家、年に二三回職人でも入らない限り窓を開けないという家が郊外にだんだん殖えて来たのは事実である。そこに住んでいるのはどんな人なのかは知る由もない、若し事故でもあったらどうなるのだろうと要らぬ心配もしたくなる。冷たい人が



棲みという字句がそれを語っている。

電灯がポツンと無人駅暮れる　大江秋月

作者は国鉄に勤める駅長さんである。ローカル線、それも赤字線ではどしどし無人駅が出来てゆくということで合理化という波が乗客に不便をしわ寄せしているようで、無人駅の電灯がそれを象徴していると思う。

金魚鉢どこへ置いても猫が泣き　別宮すき

古句にありそうな気がしてためらったのだが作者の創作された句として採りあげた。谷脇素文の漫画を久しぶりに思い出させてくれた面白い句である。私はこんな句が好きだ。

生理日と田植はからずめぐり合い　片山雅子

田植は見ているがまだ一ぺんも田植えをしたことがないので、実感としてとらえることが出来ないが何かおもしろいものを感じた。はからずめぐり合いだから、田んぼへ入らなくてもすんだのか、それとも苦しいということなのか男であるために判らなかったが。

巡礼の一人拾うてバスゆれる　村上春巳

よく晴れた山沿いの街道を思い出させてくれた、そしてがら空きのバスが巡礼をのせるのものどかな風景である。バスゆれるという結びで砂埃りを立てて走っているのは遠くに見える古寺の塔をめざしているのであろうか

久し振りちと楽かとはきかれまい　渡辺暁童

あの当時の苦しい生活を心底から知っているだけに何年ぶりかで会うたのだが相変らずらしい。少しはマシな服装をしているのだがお世辞のきらいな自分だけにズバリと聞くのも気がひけるというためらいがある。

主人死亡す

いびきかく人亡くなって夜の静か
冥土から加勢が欲しい申告期　行天千代

御主人の御逝去を心からお悼み申上げたい。かなしみの中にあって川柳を忘れずかくも立派な作品を発表された作者に敬意を表する。いびきかく人の句は結びの〝夜の静か〟というところに言い知れぬ寂しさと追憶の情を知ることが出来る。冥土からの句には現在の作者の置かれている環境があますところなくあらわれていると思った。御主人の御冥福を心からお祈りしたい。

第二回全山陰交通安全川柳大会

とき　昭和四十四年十月二十六日・十時

ところ　鳥取県倉吉市上井町・**中央公民館**（山陰上井駅下車・徒歩十分）

特別課題　「交通安全」　一人三句以内。

兼題　「用心」「慣れる」「持ち味」「違反」「帰省」各題三句以内。

席題　当日五題発表。

会費　出席者五百円（記念写真と発表誌進呈）投句者二百円（発表誌呈）

投句先　十月二十日必着―鳥取県倉吉市上井町一丁目・倉吉打吹川柳会**奥谷弘朗**

▼賛助会員―明石市大明石町一丁目一ノ三八**阿万万的**▼大阪市阿倍野区北畠三丁目七ノ五○　**西田柳宏子**▼なお土岐トク子さんは中止いずれも前号編集後到着。

旅行・宴会・リクリェーションのことならどんなことでもご相談ください。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

本　社　東京都大田区蒲田4-40-5
TEL 03(733)6951

守口出張所　守口市京阪本通2-18
三洋電機㈱本社食堂内
TEL 06(991)1181 内線588

生駒だより

麻生葭乃

—不二田一三夫宛

四十一年九月一日発行の「川柳塔」痴盲録をよんでいると機見女さんの句が、ふと目につきました。

「大阪の灯はあのあたり天の川」

だったと思うのですが、

「大阪の空はあのあたり天の川」とありました。何だか調子がもうひとつなので気になり出したのですが、今は私も、こころおぼえなので何とも云えませんが、どうもこれは「大阪の灯」の方が作者の感じが出ているように思えるのです。他人の句をまちがいなしに憶えることはとてもむつかしい事のようです。

川柳日記

麻生葭乃

（七月の句）

向日葵の虚栄は塀を越す高さ

生駒山夏来にけらしまばたく灯

寺の朝鐘は八六（やろく）の蚊帳のそと

タイムテーブル今日もレジャーを棒にふる

学校新聞なかに楯つく筆もあり

舗装道路喘ぐみどりが此処彼処

温泉の宿へ誘う娘へなま返事

おさな馴染がまだいるような片田舎

昼三味線の聞える部屋でおじやみ縫う

梅雨空の終点雲の峯が見え

一筆啓上

正本水客

—不二田一三夫宛

◎八月号訂正

い草植える水照り顔に縞つくる（水客）

◎七月号特集の路郎先生の句

◇だしぬけに…

◇お父さんは…

◇子沢山……

編集部で気がつかなかったかと残念に思いましたが……（殺人的な忙しさのなかで無理かな…）葭乃奥さんが書いて下さったのでホッとしました。子沢山の句など、子供の話し言葉に対して〝俺〟など論外です。とは云うものの私も、

〝子を死なし学校に子の多いこと〟は、

〝子を亡くして学校に子の多いこと〟と記憶していたので、本当に他人事ではないと思いました。

川柳徳川記（七）

冨士野鞍馬

家光

三代将軍家光は、慶長九年（一六〇四）甲辰の生れ、母は淀君の妹督君。幼名竹千代。春日局の教育をうけて成長、元和九年（一六二三）二十才で、父秀忠の引退により将軍となった。「御家記」に、

「大沢佐衛門と云信濃守家来百四五十石程取申者、紫（信濃守茶の間）を娶、女子一人手前へ引取、佐衛門浅草に宿を取居申候折節、お蘭（紫の娘）正月にて、門へ出遊居候所へ、家光公御乳母春日の局、浅草観音参詣の道にて、彼お蘭を被見、家光公御意に入可申生れつきとて、則時に先父母に預け、其後誰にも見せ申間敷と堅く申付、永井信濃守へ理り、信濃守娘として、家光公御奉公に出し被申也。彼お蘭、大樹家綱公（四代）御母公、今奉号法樹院殿、武州上野に御霊屋有也」

とあるように、家光の子は、

千代姫　尾張中納言に嫁す
家綱　四代将軍
綱重　甲府宰相、自殺
綱吉　館林宰相、後五代将軍

と四人であったが、綱吉は、家光四十三才の子、正保三年生れで幼名徳松、母は、春日局に気に入った京都八百屋の娘お玉、桂昌院（当時二十才）である。

寛永寺建立

家光は、寛永三年（一六二六）上野に寛永寺を建立した。これは、江戸城の鬼門に当るというところから、京都の比叡山延暦寺に擬し、江戸城鎮護のためとあって、天台宗の宗権を握る野心を抱いていた南光坊天海の申請に基き造営されたのである。（家康の遺言ともいう）寺号も比叡山延暦寺になぞらえ、東叡山寛永寺とつけた。元来年号を寺号にすることは禁じられていたのであるが、家光が強引にそれを敢てしたのである。

御寺号で時代の知れる霊地也　（三一35）
霊場は止観からげの寛永寺　（六七31）
天台に止観からげの銭の寺　（一五三9）
―止観は天台宗のこと、銭の四貫からげにかける―
寛やかに永く鬼門をおっぷさぎ　（五三20）
年号のほまれ宝と大伽藍　（二七12）
寛やかに永く鬼門を守護の山　（六九3）
御山号通用のいい世の宝　（七七24）
通用のよい御寺号を御建立　（二六29）
銭の穴あたりが丁度御本坊　（五九11）
―寛永十三年に寛永通宝ができた―
山下で円頓院は知りませぬ　（二三25）
―天台の教、円実頓悟を院号にした―
湯島から一万石の塔が見え　（一七5）
鬼の門一万石でおっぷさぎ　（筥二13甲）
―寺領一一七九〇石―
山内に東照宮を藤堂家が建立した。

日光東照宮造営

家光はまた寛永十一年（一六三四）栃木県日光二荒山（黒髪山）に、家康を祀る東照宮を造営した。その荘麓さは今に残っている。

山号は光り照すは御神号　（四八4八二12）
日の光る君は源氏の目貫也　（五九11）
下野は日の山出羽に月の山　（七二2）
玉くしげふたあれ山に髪の号　（九一61）

などと川柳にも詠まれている。

島原の乱

寛永十四年（一六三七）十月、肥前島原領主松倉勝家の苛政に反抗した島原農民の一揆は、キリシタン宗門の司、天草四郎時貞に指導されて、島原城に迫り、また原城に籠って威たふるった。幕府は十一月になって、板倉重政（三河深溝一万五千石）を派遣して、鍋島、有馬、立花、細川の連合軍で攻めたが、容易に陥落しない。更に十二月、松平信綱（老中）を西下させた。その到着前に重政は戦死した。信綱は、天草に碇泊中のオランダ軍鑑デ・リップ号にたのんで、原城へ、四百二十六発の砲弾を打ち込んでもらったが、大した効力はなかった。原城からは、

「日本中にはまだまだ立派な武士がいようものを、オランダ人に助太刀をたのむとは日本武士の名折れ、国辱ではないか」

という矢文が飛んできた。

信綱は、城内を探るため、諸家の陣に井楼（やぐら）を設けさせた。細川忠利の軍では大船の帆柱を立て、見張りの箱を上げた釣井楼を考案した。それを川柳は、

せいろふを釣ったはとんだあまい知恵（六四9）

せいろうのふけそこないは知者役者（一六六7）

せいろうははたき小鍋は大当り（三六40）

知恵者には釣井楼は不出来なり（天四礼4）

天草の後チもせいろう不出来也（四一37）

と詠み、城内の鉄砲の名人駒木根八兵衛が、それを射撃したといわれている。

鍋島勝茂の三男忠澄は、駒木根の銃丸を免れること五度、遂に先登の功を立て、乱後、佐賀蓮池五万二千石に封じられた。

鍋ぶたの上に目に立つ茗荷の子（二九4）

島原へ出たは利口な茗荷の子（三八21）

新しい鍋は天草以後に出来（四〇11）

天草の時に茗荷な御加増（五二9）

天草へ出たは利口な茗荷の子（六二19）

あま草も小鍋立てしたきつい事（一八37）

とそれが川柳に詠まれている。茗荷は鍋島家の紋である。

二月二十八日、総攻撃に、一揆は全滅し、原城は陥落した。幕府の兵力は十二万、費用四十万両といわれている。乱後、領主松倉勝家は斬罪となり、ようやく治まった。

あまくさは仏たのんでぢごくなり（天四智3）

この「仏」はキリストをいってある。

大猷公

家光の時のよい幕僚は、松平正之、井伊直孝、土井利勝、酒井忠勝、板倉重宗、松平信綱、阿部忠秋等で、鎖国、キリスト教禁止、外様大名をうまく扱い、徳川幕府を強化した

洗っても踏絵の足は気にかかり（武一八1）

そして家光は、慶安四年（一六五一）四月二十日、四十八才で死んだ。大猷公という。

近詠

大阪市　橋本緑雨

ここがよかろと極楽の近道

永久の住居を探がすとこに立ち

病人に一筆もたす最後の日

吉田水車殿

友情の見舞いに涙にじむなり

喫茶
グリル・ラウンジ
パーティ・ラウンジ
展示会場
喫茶・グリル・ラウンジ
御門
GYOMON
心斎橋大丸・そごう東入る
TEL　271 — 6684

近作柳樽

菊沢小松園選

消えるまで夢をたやさぬ泡でよし　島根県　小砂白汀

口づけを受ける角度で百合の花

空瓶の底のよごれも透けて見せ

迷うてる指へちょう蝶きてとまり

実るあてもなく切り花妍きそう　広島県　岩谷二三枝

白日へ崩れみだらな蛇苺

喘ぎゆく樹海に靴をとられまい

相容れぬ死角へ対話冷えてゆく

引き返す歩幅怒りをよまれてる　島根県　石田清泉

お砂糖の味コーヒーに教えられ

いつまでも車窓へつづく雲の峰

切花に裏表あり人の世や

付添いのつもりこちらが手をひかれ

ささやかな贅沢パンの縁棄つる　鳥取県　川崎秋女

恋までも譲って友情まだつづけ

紫陽花へこころのきずな触れず置く

いざこざを蒔いてそ知らぬ顔でおり　島根県　堀江正朗

海鳴りのよう大阪の街は生き

聞けば済む事を手さぐり何時までも

働いた汗満ち足りた湯が溢れ

ビールぐらい飲めと勧める医者が好き　島根県　堀江芳子

公害を吐く煙突に見おろされ

名刺裏むけで盲人憎めない

扇風機寝転ぶものに動かされ

川風は恋のしぐさを見てとおり　倉敷市　小野克枝

炎えるもの忘れはたらくだけの顔
手さぐりの愛へ無常の闇がある
何もかも捨てたいけれど子の寝息
子の母としての姿勢は崩されず

今治市　原田輝親

言うなれば斜陽の歳といたわられ
打ち明ける気のダイヤルへ話し中
鈴も付けリボンもつけて仔猫の死
じいちゃんと呼んで引退さす気なり

今治市　古野伶人

お清書の字でラブレター書いてくる
ボス猿の顔色見つつ手を伸ばし
虚栄の灯捨てて帰れば山みどり
夜店の灯金魚すくいにプロの腕

大阪市　小谷葉子

逆光が途絶え二人の道となり
花紋ある日　日記で朽ちていた
常識の円周カラーの替えたき日
ルーレットラッキーセブンは何の罠

竹原市　三宅不朽

女ひとり生きる噂をなぜ嘲う
雑草でよし大阪で見る緑
幻の山河掌に享く螢籠

守口市　岸本豊平次

夫を信じているから昼のドラマ
デパートの謝恩まだまだ買わす気か
したしかった隣人もいた引越荷

東大阪市　宮西弥生

胎動へ話しかけてる母性愛
心ブラをさけて御堂筋行くひとり
墓場まで連れ添う歩巾狂わない

大阪市　黒田真砂

夏柑のザラザラ心のくい違い
午後三時ホステス稼ぐ顔作る
子は若さ包む水着の赤をよる

出雲市　王紫

しあわせな人と世間が決めてくれ
菜食の効用舌先三寸承知せず
反抗期キックボクシングの構え

鳥取市　近藤秋星

百姓の悲哀やっぱり米作り
恋人の手紙も濡れて梅雨を来る
お隣りに先を越された墓掃除

岡山県　浜口志賀夫

お隣へサービスという如露を向け
対岸はそこだ命のある限り
目に見えぬ速度で闇がこゆくなり

出雲市　竹内李朋

二男歩く

竹の子よ伸びる天地がある限り
濡れつばめ緑の雨を恋しがり
病室の窓から螢渡される

八代市　船木史朗

舌打ちへ貨車ゆったりと通り過ぎ
随伴のほうが名刺をふりかざし
限界を器用に見せるストリップ

和歌山市　仮家和美

どの星がパパかと明かるい声すがる
美しき風が遊ぶよ青簾
空白の心をよぎる雨つばめ

竹原市　生信笑子

主張する声はあわれにまでひびき
ひまわりの丸い心をもてあまし
生きている自信へ海は満ちてくる

大阪市　里小路

バリュームを二度飲まされて見付からず
流行を追っても顔は承知せず
これ以上どうにもならぬ歯に通い

和歌山県　ふきあげ虎城

優雅さを秘した鏡に血の匂う
愛し合う夜の限られた花氷
絆まだ切れず符箋は夫の手

米子市　増田竹馬

世界の目月面に着く左足
子沢山今日はどの子か待つ便り
入れ知恵の其の先はまだ聞いてない

宿毛市　瀬田美知

カーセールス馬喰だった顔で売り
ベルト締めれば女余情のかげもなし
自信まだ賭けて見る気のヘヤーピース

島根県　栂みどり

雨あがり傘に真夏がはねかえる
朝な夕な魂かがみにあずけたり
子沢山嵐のように朝を出る

鳥取市　稲村光枝

塵芥でさえ流れに乗れば美しく
熱帯魚じゃないと病身拗ねてみる
洗濯をしてさえおけば乾く梅雨

神戸市　来住　タカ子

噂溜めて避雷針くもを待つ
廻り燈籠に灯を入れてから昏れる庭
雨雲を突き刺すごとく鉾立てり

藤井寺市　古結　百水

もろて来た朝顔チョボッと咲いて見せ
他人事の浮気へ気安う気を合わせ
生きている証拠に苦労つきまとい

岐阜市　市川　鱗魚

足音がみどりの中にある浴衣
濃度障害ふふん後妻が若かすぎる

大阪市　江城　功雄

歩かねばこの世に命ある限り
職去る日労わり多き目に出逢う

下関市　志賀　木石

金持ちがいるだけ昔の友はいず
金が何だ何だと語尾が泣いていた

竹原市　森井　菁居

笑っても泣いても太陽系の中
鳩は鳩なりに苦労がつきまとい

河内長野市　森本　黒天子

連れ添うた女房の齢へ逆わず
高血圧のお蔭で内風呂やっと出来

新潟県　高野　不二

恋のささやきに水中花ゆれる
ストに行く朝も弁当提げて出る

八尾市　香川　酔々

サングラス中に女の齢があり
身構えてみたがやっぱり女です

大阪市　和田　痴亭

銀行へ勤めていますつけで飲み
駅弁へもう奉仕するハネムーン

大阪市　藤田　頂留子

杭全神社祭（一句）

神様も交通事情には止むをえず
一言の波紋が女をたじろがせ

八幡浜市　別宮　すき

職人の腕が泣いてる近代化
満員車かよわい腕とは申されず

和歌山市　増田　めぐみ

台風に新芽も耐えてゆれ動く
日のながさ風鈴までがすましこみ

和歌山市　増田　次章

束の間の栄光鉄骨空に立つ

いさかいのまま足音が遠ざかる
大洲市　横田放人

人並の病気か錠剤もろただけ
吸う息に故郷やっぱりいいところ
羽曳野市　榎本吐来

真面目さを買ったと馬鹿のよう響き
金を喰うてるように聞こえるママの愚痴
堺市　羽田一扇

手打ちうどんの味を覚えた舌になり
水槽を鮒飛びしてから慌わて
七尾市　松高秀峰

追伸の方に用件書いてあり
目的はあなたでなかった電話口
河内長野市　小川耕人

すし詰にゆがんだ新聞読まされる
停年退職
仕事にも趣味にも鬼になれなんだ
鳥取県　大山果風

百姓は俺一代の手をみつめ
米の値が上って見ても四反四畝
奈良市　桑原千里

写真送り了って旅行万事すみ
デモをせぬ人あと始末まかされる
愛媛県　瞪本満子

長針へ短針すなおについてゆき
言いにくいことを手ぶらでズバリ云い
河内長野市　井上喜酔

よく照った西瓜をさげて客になり
蒸発が二人で日焼して帰り
神戸市　横山孜孝

お天道梅雨の晴間の忙しさ
達筆の便りへ返事出し遅れ
京都府　福村飛龍

浮ぐだけよとは謙遜な泳ぎぷり
梅雨だからあたり前のように降り
岡山県　山田止水

飽きもせずテレビ体操よく続き
ゴシップへ背伸びもしたい未亡人
大阪市　河原林比呂路

たんぽぽの種も旅立つ風を待つ
春を待つ心新芽をうれしがり
泉佐野市　大工チヨ

看護婦に見とれ注射も苦にならず
派手な柄着れば鏡に笑われる

広島県　南条露声

くだまいた当座まじめな酒に酔い
長々とニキビ一つへ見る鏡

大阪市　平井露芳

月からは日本黒いしみに見え

大阪市営住宅当選

大阪の隅で産声上げなおし

羽咋市　三宅ろ亭

ガラス屑浴びて事故車の中に醒め
個性的組織の中に入れられず

大阪市　島野大吉

パラソルに首二つ出た砂の上
猫の手が大きく写った金魚鉢

竹原市　時広一路

真実に触れず日記の白いまま
隙のない眼が心まで近寄せず

岡山県　武元柳子

蝸牛あなどっていて逃げられる
決心を動かぬうちわの手に見つけ

大阪市　有信新之助

引っ込みがつかず自分を見失しない
老醜が健康法とて睡りこけ

広島市　槇田英詩

見合いですけれど僕には過ぎた妻
露地の犬しぶしぶ隅に寄ってくれ

京都府　明嘉彦

彼女かと聞かれ彼女にしたくなり
たくらみがあるともおもう受話器置く

尼崎市　中谷利美

当っては砕けてみせる処世術
責任を取った自殺に遺書がない

大田市　藤田軒太楼

寝転んで浮かんだ思案にすると決め
親からの髪では足らずかつらつけ

鳥取県　鈴木村諷子

立腹は茶碗の知ったことでなし
手をこする油断に蠅はたたかれる

松江市　大峠可動

追いかける生活へ母のサロンパス
幸福が落ちていそうで振返り

鳥取県　両川洋々

孝行の一つは兎許証取らず
金借りに来たに晩めしまでよばれ

熊本市　高野宵草

妻だけを頼れば妻もよりかかり
舌打ちが聞こえぬとこへ客を置き
今治市　渡辺南奉

八月の汗を真珠として拭い
湖の澄んで野心のもろく消ゆ
鳥取市　福山貴恵

長かった成人の日よ寡婦護る
長い目で見つめてやろう皆わが子
豊岡市　不二本和久

今のこと見ていたように月が冴え
木名の手紙は禄なことで来ず
鳥取市　藤本和宏

子がみんな家業と違う技術つけ
病床の親父に指図うけにゆき
鳥取市　谷尾透風

親切な顔ですすめて儲けはり
過疎の村おみこし担ぐ者もなく
大阪市　花田繁子

雨降って埃立たねばカビが生え
月へ飛ぶ世にもろくも雨に敗け
大阪市　大西為二

期待する心があって後になり

塗下駄をはいて幹事に別な役
大阪市　木村浊水

螢一つ追えばかすかな星となり
ホステスの侍る残業と妻知らず
宮崎市　野口卯之助

負けて勝つ妻の涙に逆えず
八尾市　高杉千歩

ほれるよなミニはいないねミナミキタ
大洲市　堀内暁風

手内職あす納品の灯も更ける
島根県　中島英子

同行へ老女の念仏リズミカル
堺市　藤谷象園

玄海の妥協許さぬ波しぶき
諫早市　原田明春

民宿の礼状娘だけに来る
兵庫県　藤井雅佐女

許されぬことと知りつつ燃えたがり
大阪市　堀口欣一

民宿の屏風明治の墨の色
西宮市　加納聖司

露路奥のトマトは小粒ばかりなる

鳥取市　有田鹿の子

青い眼の客へ故郷の味を見せ

大阪市　石賀文子

ナイターの説明聞いてじゃまがられ

和歌山市　吉野冨子

親切な話を拾った雨の街

和歌山市　田中政夫

万博の外貨へ田舎も模様替え

岡山県　片山雅子

植え終えて花壇眺めているゆとり

大阪市　岡本まさひろ

露の間の朝顔だけに清く咲き

貝塚市　行天千代

カラー写真アップで撮った皺のかず

岡山県　出原敬一

叱られた言葉も借りて部下叱る

高槻市　山田スミ子

これしきと言うては見たがおしくなり

大阪市　田中多幸

大国が小さな島をあきらめず

愛媛県　西田幹

優勝は又大鵬かテレビ見ず

泉佐野市　大工静子

ボロ糞に言うてもお百度踏んでくれ

羽曳野市　麻野幽玄

そよ風のような心が引付ける

和歌山県　加納花秀

オーバーな宣伝世間は間に受けず

岡山市　谷森和風

ボーナスで家計簿ちょっと息をする

寝屋川市　福富隆子

捕虫器を置けばねずみは道を変え

東大阪市　落合思月

老醜の我れに付き添う妻あわれ

島根県　大森孝華

移り香へ未練心をだいじがり

仙台市　川村映輝

肩書のとれた名刺を出ししぶり

長野県　中尾愛

診察を終えて出た目に陽のまぶし

鳥取市　河口忠志

言い難いことはノートにしとく妻

鳥取市　夏目葉舟

食い荒す膳を残して宴果てる

鳥取市　藤本恵子
叱られて叱られて習字今日もすみ

鳥取市　藤本鎭也
三面記事みんな美人になって逝き

米子市　原氏勝久
美容術帰れば飼犬吠えかかり

京都市　藤本征山
父病んで父の偉さがよくわかり

鳥取県　藤泰嗣
泌み込んだ溜息ダイヤから聞え

鳥取市　藤本佳女
何の気もないお喋りが過去に触れ

鳥取県　中沢慎利子
父に似た人へ親切するも旅

鳥取市　米原一稔
仕入れする紙幣の皺は伸ばしとく

東大阪市　斎藤三十四
豆の葉に翅を休めて午後の蝶

大阪市　木村久子
一番電車アクビかみかみ本めくる

大阪市　今井隼人
名物の水の都も水にごり

大阪市　吉野志津
善光寺共に詣でて先立たれ

大阪市　大池芳
下町におかみと呼ばれてる活気

大阪市　松岡進
主人より自分の好きな物を買い

善通寺市　伊藤歌子
人生の旅路もここに喜寿の駅

高知県　山川勝子
スカートを短かくしても年は年

出雲市　飯塚全喜知
陽焼けした笑顔見るよな電話口

出雲市　安井寿年
七十才空気のような嘘を言い

出雲市　石倉晃
お茶漬の味が素敵な旅帰り

出雲市　田中泥子
救われて行けと死ぬ子の手を握り

島根県　栗垣信雄
知らぬまに老眼鏡の年となり

出雲市　土江久美
早や一年僕の臭いのするベッド

近詠

長野県　高峰柳児

貧相にまつわる失敗談だけ豊富
ボーナスへ満を持してる浪費癖
冷でいい昼酒そそくさ壜を抱き
眼鏡かけかえて重役語がきつい

今治市　月原宵明

歩道橋見おろす日本変り果て
釈然とせぬまま友情遠ざかり
水すまし泳ぎ休ます風があり

野間仁根画伯訪問

画伯とも見え職人だとも思い

大洲市　米沢暁明

女連れ午後のコースを変えさされ
尾行して来たら警察署へはいり
反省をさすには声が大きすぎ

肥満型これ見よがしにシャツを脱ぎ

和歌山市　秋月宏方

見えているように曲った白い杖
蛙なく田から不潔な灯は見えず
能面にどこか似ている共白髪
売れたとてたかが知れてる綿菓子屋

小松市　山上千太郎

うまい空気だけで生きられぬ過疎部落
割勘のていどを飲んでたべてくる
煙突の臭いをそよ風つれてくる
おでんに酒のこのご機嫌をゆるされよ

名古屋市　長谷川鮮山

子の寝顔再婚しようかなと思い
掛け合いに行って見事にかかる罠
お百度を踏む思惑をもった肚
芸なしの奴とも云われ生一本

趣味を超えている（二）

〈生活の中の川柳〉

森下冬青

村田周魚氏は、句集と文を戴いたことはあるも一度もお会いしていない、川上三太郎氏は二度ほどお会いしている、岸本水府氏は一度お会いしている。麻生路郎氏は四度ほどお会いしている。路郎氏と酒くみかわしたというより下戸の私は、せっせとお酒の酌をした。今は亡き西本三笑さん宅で、私が絵を描き、路郎氏はその画につれ、句を書いて下さった衝立が記憶に残っている。こうした四大家は、最近亡くなられ日本柳界の四つの巨星墜つの感をしみじみ深くしている。

ところで四大家中、路郎氏と一番親しくしたが、煙草は、煙りの絶え間がない、酒は酒豪ときている路郎氏が、あの不養生でようまあ七十年以上も生きられたは不思議である。もっと酒たばこ、をつつしまれたら九十年も生きられる先生ではなかったかと思った。

六月三十日に「川柳塔」七月号を戴き、こうしたことを書いたが、高鷲亜鈍氏の作品に、（森下冬青氏へ）とあるのに気を引かれすこし書いてみたい。

亜鈍さんは、緑内障の眼病になられたと知った。私は白内障で入院手術で、活字も読め街へも出る。

夢を見る愉しさに床へ入る　亜鈍
誰も彼も忙がしいのだほっとかれ　〃
三回忌兄の写真をなでてみる　〃
音のない渦潮のなかで揺れ　〃

これは、私が半か年ほど全々視界ゼロのとき、亜鈍さんの心境に近い心になったのだから氏の作品に胸うたれる。

人間はどこも悪くない息災時は、自分の身体の機能を意識していない。所謂、健康な時は、肺臓、心臓、じん臓、肝臓、すい臓その他の存在を知らない、身体のこの辺に有るだろうだけである。だが肺一つ病らえば、肺の存在を痛切に感じとる。眼もそうである。私は眼を病い、眼の存在と有難さをいやというほど知らされている現在でもある。

亜鈍さんが、もし眼を病われなかったら、おそらく前記四作は創れなかったと思う、勿論あのような作が創れない方が仕合せにしても、現実、川柳塔に続けて、眼に集中した作品を発表されたことに、氏の作品を味読するたびにドキンとしたものだ。

川柳を趣味なんかと考えたり言うたりするときは、うわついている。「生活即川柳」となれば、趣味を越えた川柳へ自己の命がかかっている。ようするに生活の中に生きている川柳である。激しい性格は、平坦な道でなかった麻生路郎先生も、川柳が生活の中に息吹きしている所謂「生活即川柳」である。

高鷲亜鈍氏も路郎氏と、歩いた道は相違していても、眼が最近の川柳を生み、生活の中に川柳が生きていると私はこう観たけれど、間違っていようか、川柳塔の七月号を味読してここまで書き、失礼なところはおゆるしを願いペンを置く。

（川柳窒の目主宰）

川柳の中に多彩な絵

馬場博治

川柳塔愛読させていただいています。二月号の「川柳は患っていないか」の特集は、柳界のモヤモヤの所在が分って、タメになりました。若本さんの書かれていた「みの虫の云々」のあたりが、やはり本当じゃないかと思います。少し歩いては行きづまり、自分の書くものはヘドが出るほどイヤになり、人の作品ばかりが立派に見え、それでも書き続けていく。横光利一のいうデモーニッシュなものに追われ続けるのがモノ書きの宿命というべきでしょう。このデモンが時折り鬼子を生み落します。親もその子の値打ちが分らない。人が値踏みをして傑作だという。作品とはそんなものではないでしょうか。

鬼子はめったに生れません。柳誌の一号にせめて一つか二つあればいい方でしょう。編者も何の気なしに小さな活字で隅っこの方に組み込んでいる、そんな作品で何年経っても忘れられない句もあります。

十二月三十一日銭がない　三太郎

私はこの句が忘れられません。作品としてどうか。小うるさい批評は、私にとって何の意味もありません。批評を越えたところで、この句はクサビのように突きささっています

それは三太郎氏の重みだと思います。私が日本の年輪「川柳」の項で引用させてもらったあの遺書もやはりそういった意味での重みを持った名文でした。

ではどうしてその重みを持ちうるのか。書き続けること、見続けること、ただそれだけだと思います。何のために見るのか。この生をいとおしむためです。

ままごとの世帯くずれが甘えて来

これだけのイメージがこれだけの字数でどうして表現できたのか、ほとんど奇跡に近いと私は思います。この作者は、「川柳の患い」と自覚していたでしょうか。おそらく「患い」などとは無縁の人であったと思います。生れてはじめて川柳を作った人であったかもしれません。川柳にはそんな広さがあると私には思えます。その基調にあるのは、痛烈に生きよということ。若い世代への理解や批判から何は生れないと思います。理解と批判に駆りたてられていくその過程に句があると思うのです。生きることが何であるか、よく分りません。だが「ままごとの世帯くずれが甘えて来」そんなすばらしい一瞬の絵を心に描きとめられるなら、生きていることもすばらしいじゃないかと考えます。

テレビの下らない絵に感動は失われてしまいました。川柳の中に私は多彩な絵を期待しています。

しろうと漫談と思って読み過ごして下さい。

（不二田宛通信から）

（朝日新聞東京本社・論説委員）

川柳七草

戸田古方
谷沢好祐
清水白柳
吉田水車
阿万万的
本多柳志
不二田一三夫

川柳は思想する

戸田古方

イギリスの新造巨船クイン・エリザベス二世が今まで四日で行けた大西洋を七日もかかって航海したという週刊誌の記事を読んで、私はうれしくなりました。近頃珍らしい時代錯誤が気に入ったからです。速さの方は飛行機にまかせて、うんと豪華に、金持のアメリカ人達から搾り取ろうという斜陽ジョンブルの魂胆なのでしょうか。

柳友凡九郎との対話で、路郎先生のいわゆる「人門陶冶の詩」とはどんなものなのだろうか、今さら何をといわれそうな話題が出ました。初心者でもないふたり、しかも二人ともこの「人間陶冶」に魅かれて川柳を作りはじめたのです。もう十分わかっているはずですが、やっぱりむつかしいのです。

世の中は今、何もかもが急ピッチに変ってきております。川柳だけが例外でいいわけはありません。この頃の句を見ておりますと、川柳も何とか動かねばならないような気がしてならないのです。

川柳は平凡な人間の中に詩を見つけることかもしれません。そこにユーモアや穿ちが云々されるのです。人間ってずい分ヘンな奴で、どこか一ヵ所でよろしい、つつけばおかしいところがにじみ出て来ます。だから川柳の種は一杯あります。しかし、「人間陶冶」となるとちょっと趣きが違うようです。「人間陶冶」は現実をみつめるだけでなく、理想を求める動きを含んでいるように思われるからです。従って、「人間陶冶」のためには並々ならぬ努力が要求されねばならず、「人間陶冶の詩」となるためにはここらでしっかり考えを決めなければならないと思うのです。

だといって、間口だけ広げてもいけないでしょう。近頃の世の中を見ていますと、学問を精一杯動員して、高能率を求めています。それこそ鹿を逐うもの山を見ずのたぐいで、足もとの凹みに躊き通しのようにも見えるのです。それで意地悪な話ですが、クイン・エリザベス二世号の逆行に拍手したくなった次第であります。

逆さまにしたら左が右になります。しかし、逆さまにしたところで、完全でない人間のすること、左が右になっただけで幸せが増えてきたとばかりはいえません。ひょっとすると、百年前、千年前とちっとも変わってないような気もするのです。輪廻といいますか、同じことを性凝りもなく繰返えしているとしか思えません。右と左は何処かで連結しています。

だから、公平や平等が進むと、それこそ本当の自由で民主的な世界になるのでしょうが、極端になると独裁や専制をまねきかねません。人間は他人より何処か優れていると自覚しないと我慢できないものらしいのです。ソ連の指導者達は自分らこそ真の民主主義の国だといっていますが、革命以来五十年、未だに専制や独裁を棄てていない理由もわかる

ような気がします。ゲバ棒のスチュデント・パワーも、余り極端になり過ぎると右翼に乗じられないとは限りません。

それでは「人間陶冶」とは一体どのようなことなのでしょうか。「人間陶冶の詩」とはどうして作ればいいのでしょうか。

そういう人間の弱さ、醜さを知りつくすことが第一、それからどう解脱したらよいかを考えることが第二かと思います。人間の現実の姿をつかむというだけなら今の川柳人は誰も一般の人よりずっと鋭いでしょう。また、そういう訓練も自然にそなわっている筈です。しかし、次の向上を目指すとなると話は別になってきます。解脱なんかそう簡単にできるわけがないのに句の上で、取澄した、悟ったようなのがありますが、底のない器のようにいたずらに物笑いの種になるだけです。そうだというて、そんな句を練っているうちに何が欠けているかと気付いてくるのかも知れません。こうした句はえてして、理に傾いて堅くなりすぎかる、情に悼して流されるかです。

それではどうして、と再び申しましょう。

万国博のテーマは進歩と調和でありますが調和のある進歩、味のある前進をするために何よりも大切なことはソクラテスの言葉にもある、自分自身を知るということであります。ここで人間陶冶の前に「人生批判」「社会批判」とあったことを思い出しましょう。凡そ一番わかっていそうで、わからないものが自分であります。人生批判は自己批判に極まりそうです。川柳するときは心が純化され毅然として客観できるようになります。自分以外をまず厳しく見つめるでしょう。それが人生批判であり、社会批判であります。そうしているうちに自己批判の方へ向いくれたらしめたもの。これを反省というのでしょうが、倫理や道徳でいう反省とちがって、楽しみのうちにごく自然に行なわれます。川柳の徳とでもいうものなのでしょう。逆さまの世界に知られなかった真実のかくされていることもわかってくるかも知れません。この世のいとなみの無価値な輪廻に案外早く気づかせてもらえるかも知れません。もしこうなると次の段階、理想を達成するための詩を詠いあげずにいられなくなるのではないでしょうか。

えらそうなことをいっている私自身それが出来ているわけでもなく、やはり観念の遊びの一種かもしれません。こんなということが自縄自縛、口に出すべきことでないといよいよ思われてまいります。

あまり深入りして、えらそうなことはいわぬこと。まあ、それにしても、「人生批判」「社会批判」をふくめて「人間陶冶の詩」の道がそんな方向でないかという考えを整理してみたまでです。お叱りと、お教えを乞いたいものです。

類句、暗合句について

谷沢好祐

真っ先に歩は殺されるためにあり　美房

川柳塔五月号（四四号）秀句鑑賞にある。私は以前の自分の句を、再度お褒めに預ったような気がした。それは

真っ先に死ぬのは何時も歩であって　好祐

川雑三六・十一（四一四号）

次号の「名句と難句」の所で路郎邸の解説入りで、褒められているからである。

川柳塔の第一回路郎賞候補の句に

枯れてなおあざみのトゲは人を刺す

四一・一〇（一三号）　きさ子

が出ており、故梅里、小松園両氏が推薦され小松園氏は一席のお褒めである。この句も

枯れ果ててなおバラのトゲ突きささり

川雑三六・九（四一二号）　好祐

数年前の小生の句と同巧異曲である。

川柳雑誌時代にも、同じような事がありしかも同じ号に二句もあったので、路郎師に質問状を出したが返事は戴けなかった。それはお布施では食えずに幼稚園で食い　好祐

川雑三四・六（三八六号）

お寺では食えずに保育園で食い　一水

川雑三九・五（四四四号）

私立でもいいわと親の気も知らず　好祐

川雑三五・八（三九九号）

私立でもいいわと親の気も知らず　圭水

川雑三九・五（四四四号）

特に後の句は一字も違わなかった。以上は川雑、川柳塔に現われた、私の句との関連である。私は川雑と川柳塔の他の誌は知らないのでこれは氷山の一角であるかも知れない。

日本人は皆同じ飯を食い、排泄して同じような生活をし、同じような事を感じている。十数人の句会ですら同着想の句は数句生れる。私も他の川柳家も、皆避けようとしているが、絶対無いとは断言出来ない。これも十七音字という短詩型文学の宿命であろうか。

こんな事を、完全に防止しようとするなら、日本全国津々浦々で作る川柳を、コンピューターに一々登録して覚えさせて置き、選者が選をした後、相撲の写真判定ならぬコンピューターの川柳判定を必要とするだろう。

類句・暗合句の発表を防止する道は不可能に近いと思って、悟るより仕方のない事であろうか？　とにかく先に発表した句の方が、先取権を持つことを主張出来る位であろうか？　誰を責めるとか野暮な事は言わないし、また自らもする可能性があるから言えもしないが、お互いに余り良い気分でないのも事実であろう。

類句恐るるに足らず

清水白柳

いつも私は小句会などで類句の問題が出ると必ず、類句恐るるに足らず大胆に作句せよと言っています。それは好祐氏も指摘されているように類句の発表を防止することは残念ながら不可能だと思うからです。川柳作家一人一人が成長してゆく過程はほとんど同じようなものだろうと思います。ですから多少の差こそあれ先人の発表した句と大同小異の句を作りながら伸びてゆくのですから類句の出来るのは当然の帰結なのです。甚だ失礼な言い方で気を悪くされるかも知れませんが、好祐氏が指摘されたご自身の句も先人がすでに詠んでいるかもわかりません。ご自身の作品以後のことは判りますが以前のことをご存じないからで潔癖なお気持ちは同感ですが、ああ、あの作家もどうやら自分が十年前に達した境地に今やっとたどりついたのだなというような気持ちで見守ってやってほしいと思います。

もし現在までの句を全部コンピューターに覚えさして選句したら恐らく現在の伝統派とよばれる句は一句も残らないだろうと思います。残るのは前衛的な句と時事吟だけかも知れません。

また自分としては自信のある作品が、何処へ出しても没になるという経験をお持ちの方があると思いますが、それはその作品がつまらないものだからではなくて、レベルに達した作品ではあるけれども類句があるからなのです、ですから私は、そうした自信のある創作は句帳に残して置いて、自分の句集にのせなさいと申しております。その作家の成長を示す作品の一句としてであります。

さて、類句は恐れてはいけませんが、いつまでも同じ境地でマンネリズムな句ばかりを作句していることを恐れたいと思います。少しでもいい作品を残すためにも一句一句に精神をこめてゆきたいものです。

吉川さんの川柳

吉田水車

文豪吉川英治さんが若き頃川柳にいそしまれ、それが吉川文学完成への心の源となったことは、あたらしい柳人間にはあまりよく知られていないようであるので、今お作品の全容を知り得ないが判ったものを左にあげさせていただき同時に柳歴のあらましを記すと、

○川柳開眼と柳号雉子郎の由来

吉川英治全集第四十八巻「忘れ残りの記」の四半自叙伝の中にこうある「休日、句会などにも出初める。井上剣花坊、近藤京魚、井上凡骨、川上三太郎氏らと相知る。新川柳、発行にあたり柳樽寺同人となる。雉子郎と号す」明治四十五年二十才。この雉子郎のことについては吉川さんの吉をもじったとも言うし、また川上三太郎氏の「川柳二〇〇年」の中で見ると「吉川さんほど親をおもい、ご両親もまたよくいつくしまれたのは例がない位である、柳号の雉子郎もその辺から来ている云々

○作　品

日本橋ガンばってゐる馬の糞　　雉子郎
貧しさもあまりの果ては笑ひ合い
世の中におふくろほどの不仕合せ
みなし子の独り覚えた笛を吹き
初日の出哀れは餅が売れ残り
貰はれてゆく子は袂ただ嬉し
息絶えてなほ閉ぢぬ眼の影や何
空家の窓に日干しのきりぎりす
おふくろは俺におしめも当てかねず
脚二本蒸汽の窓にブラ下り
天にも地にも傘を瞥女抱え
お座敷でなくバッタリ道で会いたい
この先を考えてゐる豆の蔓
おごられて封切る金を愉み見る
掻いだして哀しうなりぬ行李の底
めしいの子留守居に笛をかい探る
花明り帰る仄かな恋をして
日曜を烟草に酔ひぬ子を持たず
なつかしき日を張板に張りつづる
花見から帰らず乳に飢えてあり
京に丈伸びて情を知り初めし
誇らしゅう風にあく眼よ洗い髪
肺患の眼を燃えさせる女客
けだものと呼ばれ尽して立志伝
生きてゐる証拠に飯を食ってゐる
柳原涙のあとや酒のしみ
夕がほへぼんやり帰る神隠し
神代杉は末世の女下駄
二度褄にしんぞ男のあたたかみ
あめつちの中に我あり一人あり
店先に一つ落ちてる果物屋
日光の町を異人の仲がよし

（川上三太郎氏「川柳二〇〇年」より

嬉しさに憂きに鬼灯ふく女　（大正）
何尺の地を這い得るや五十年　（明治）
みじめさは手柄が赤い夜店番　（大正）
一人食う時にポツンと紅生姜　（大正）

（川上三太郎氏「川柳入門」より

因に昭和二、三年頃の柳誌大正川柳に雉子郎句集が載せられている由。昭和十五年岸本水府氏文学雑話より

○井上剣花坊氏との交遊

右の自叙伝の中で「句作や江戸文学研究の上で教えをうけたことを除いても、普ならないお世話を蒙った。このことは多年いう折もなかったのでぜひ書いておきたい」と記されているのでもよくうかがえる。

○吉川文学への転心

同全集第二巻に添付の月報（昭和四十一年十二月）の中で川上三太郎氏が執筆されているのによると、

「関東大震災（一九二三）上野でスイトンを売る、夜々流離の人々と樹下に眠りあらゆる境遇の人間の心に会う、このことより卒然として文学の業の深さに感じ文業に入る」

○川柳への述懐

番傘誌の昭和十二年十一月号の川柳雑話で吉川さんはこう言うておられる。

「雀百までの譬のように、川柳に出発している私の文学には、随所に川柳があるとは、近来悪文を書いて繁忙に趁われているので、作句は怠っているものの、そう言われてみれば自分のどこかに川柳は常に住んでいるように思う」と。

○初期の文業（川柳関係）
大正三年二十二才「文芸の三越」に川柳一等当選
大正五年二十四才「川柳隅田川考」脱稿
雉子郎の筆名による文業（作品年表より）
大正三年江の島物語
大正十一年でこぼこ花瓶
馬に狐を乗せ物語
親　鸞　記
大正十四年三十三才　キング創刊号連載
剣難女難、より英治の筆名を用う。

以上のように若き日の吉川さんはその逆境と辛酸を克服されつつひたすら文業への大道を進まれて不世出の大業を成されたのである。吉川文学を仰ぎみるたびにその底流に川柳のあることを知るに及んで柳縁につながる我々として、まことに愛惜と敬慕の念深く、拙文を草して併業を賛える次第である。

花火ほか

阿万万的

花火とは一五四〇年頃イタリアで初めて作られ、日本へは天正年間に伝わっている。そしてその技術は日本人の好みによって大いに発達して来たのである。

元々原料は黒色火薬即ち硝酸カリウムと硫黄と木炭が主剤となっている。

近頃の花火はこれに燃焼を助ける酸化剤や着色剤が添加されている。着色剤の一例をあげると、

赤　ストロンチューム塩
黄　ナトリューム塩
緑　バリユウム塩
青　硫酸銅、銅粉
光輝　アルミニューム、マグネシュームなど。

大きな花火も夏の風物として欠く事は出来ないが、線香花火にもまた夏の詩がありうたがあるのだが、この松葉に似て飛び出す花火も硫化カリウムが熔融しながら不完全燃焼の木炭粒と火の玉を作っているが表面に近い木炭が酸素を得て高温で燃焼して飛び出すのだと説明している学者がいる。

科学が人間の夢をだんだん味気ないものにして行くのは月へ行こうとする人工衛星だけではなさそうだ。

伸びて行く科学が夢を追いつめる　万的

みつばち

みつばちは言葉を持っている。そして種類や地方によって少しずつ異っているのも方言と見なせば致し方ない事だろう。

みつばちの言葉とはダンスなのだ。

みつばちが蜜を見つけて帰って来ると早速ダンスで同僚に知らせる。それは右回り左回り交互に円を描いて踊りまわるのである。そして蜜の場所が相当遠いときは円形ダンスから尻振りダンスとなる。そしてそのテンポ、歩く角度などで蜜の量、距離などこみ入った事まで知らせるそうである。

国際スパイ小説が映画に踊る言葉をとり入れたら華やかさを加えた面白いものが出来るのと違うだろうか……などと思って見た。

生活のダンス　みじめな影も持ち　万的

人工降雨

ひと頃人工降雨ということが騒がれたことがあった。

しかし本当の人工降雨なんてあり得ないのである。快晴でしかもカラカラに乾いた湿度の低いときには、如何に化学の粋を尽しても いっこうに雨は降って来ないのである。

ただぐずついたお天気でありながら雨が降らない、ちょうど子供が泣き出しそうな顔をしながらじっとこらえているときちょっとしたショックをあたえると急に大きな声で泣き

出して止まらないという経験はだれにでもあるものだが、人工降雨もこれと同じように湿度の高い空中に沃化銀の煙を上げるとかドライアイスを飛行機で撒くとか、ショックをあたえると雨が降り出すのである。

勿論昔からある雨乞いの太鼓をどんどん叩いて空気に振動を与えるのも、全く効果がないとは言い切れない。

迷い子の子母を見つけてわっと泣き　万的

きのうきょう

本多柳志

◇近頃の月刊雑誌や週刊誌の小説を読んで思うのですが、あの卑猥醜悪な肉体小説のはんらんと横行は一体どうした事でしょう。今の所謂作家とか文学者と自称する連中には、あんなものより外に書く頭も手も持たないのか知らん。編集部からの注文や要請なら何を書いても、金にさえなれば構やんやないかと言うかも知れんが、あんなくだらんものを金を出して、読まされている多くの読者の事を思うとなさけなくなる。実際、そうすると君はあんなんお嫌いですか。いいえ大好きです。これでは三文漫才になってしまいますが。

◇近頃、欠陥何々という事が、いろいろな方面で使われているようですが、自動車に始まって洗剤、電気かみそり、ヘヤードライヤー等にちょっとした欠陥があっても、直接人間の安全をおびやかすとして、それぞれの業界やメーカーに対して、担当の役所から警告や回収修理を命じられているようですが、自動車やドライヤーならちょっとした部品の交換で、事が足りるし安全なものになるがこうした、欠陥小説が将来にわたって読者に与える実害の方はもっともっと大きく人生への不安をもたらすのではないか知らん。

谷崎以後文豪と言われる秀れた作家の少ない、日本文学には無理な注文かも知れんが、もっと深く人間を見つめた、人間の苦しみ、悲しみ、喜びや悩みを掘り下げた、ほのぼのとした文学というものが、日本の文壇にもあってよいと思うがどうでしょうか。

金に目がくれて脱がせる原稿紙　柳志

スクラップ・ブック

不二田一三夫

二人へモノを十コ出されたら、四コよりとらぬボクは、神や仏に絶対的な信用があると信じて神や仏におがんだことがない。そんなボクをボロのチョンにいためつけた人があった。

妻や子どもたちは泣いて怒った。よっぽどボクが可哀そうだと思ったのだろう。しかしボクは、負けたとはおもわなかった。だが相手がどんな死にかたをするか、この目でたしかめたかったので、その日からスクラップ・ブックへ新聞にのる人たちを切り抜いてはることにした。相手は著名人であり、かならず新聞の隅っこに出るはずだったからだ。

ところが、相手が死ぬまでに、ある友だちが自殺をした。また別の友だちは夫婦心中をした。イヤなことがつづいたが、とうとうピリオドを打つときがきた。

相手は変死こそしなかったが、家はつぶれてしまった。ちょっと気の毒には思ったが、こんなボクに神罰はまだあたらない。

★

▼**柳界短信**▲**房川素生追悼句会**は九月二十一日正午から、国鉄元町駅北百米、海洋会館で開催。兼題「道」「素顔」「一生」投句締切当日二時。

▼八木千代・林瑞枝両氏の同人推薦者に加藤貞山氏を追加。▼**堺・若芽合同句会**は九月十三日・題—恋人・酌ぐ・読書・摩天郎宅。

親切

原　独仙選

親切な車掌だったと旅帰えり　勝子
度の過ぎた親切妻にうたがわれ　魚山
行きずりの親切名前聞き忘れ　章雅
下心ある親切がよう解り　弘朗
親切な娘と親が先にほれ　思月
車中での親切他人へして返えし　綾女
親切にすればお客が客を呼び　鶴丸
小さな親切新聞にでかく載り　花秀
親切が身に泌み更生誓わせる　忠志
親切に哭いて秘め事打明ける　征山
親切を解部してる或る日寡婦　里風
ほんとうの親切痛いことも言い　よしひろ
親切な友に逆境支えられ　泰嗣
親切な苦言とわかり掌を合わせ　礎山
隣席の親切嬉しい船の酔い　佳女
親切が叱咤となって頬を打ち　春日
親切で母は涙の多い人　鱗魚
親切を譲り合ってて座をとられ　暁風
妻から見れば親切限度越し　素身郎
売物にする親切のすぐに剝げ　軒太楼
落物そっと届けて名は告げず　道雄
親切をうるさがられる反抗期　英子
親切に届けて調書に時間くい　政夫
親切が御縁息子へ嫁の口　露声
親切なお人やっぱり下心　不二
親切についほだされた仲となり　代仕男
お礼いわれてそんな親切したかな　古方
親切で貸して立退料で揉め　葵水
小さくとも旅の親切身に応え　藤波
タクシーの親切すぎる怖い道　木魚
親切をどう取違えたのか女　どんたく
親切の裏にひそんでいる秘密　祥月
親切で返えした球が溝へ落ち　虎城
親切な店に集まる市場籠　双葉
親切な叔母であったと三回忌　いわを
親切な心が住みよい町にする　トク子
本当の親切黙ったままでする　七面山
親切の奥の心を見すかされ　雅佐女
親切を差して帰えった俄か雨　史朗
親切が嬉しい旅の国訛り　一二三
家中の親切今日は敬老日　芳子
佳
道聞けば紙に地図まで書いてくれ　ひで子
温い手だった横断助けられ　正朗
窓口へ親切無名のまま届け　古心
先輩の苦言の裏の温かみ　芳仙
あきらめた財布そっくり届けられ　白汀
人
譲られて譲って楽しバスの窓　秋女
地
親切な人で良かった落し物　洋々
天
突き当り折れて曲ってまだ教え　千翁
軸
震災の親切今も続く文

家

野呂鵜汀選

家貧しけれど鈴虫くつわ虫　礎山
小さいが地図にのってる一軒家　白汀
仏壇の位置を誇りとする我が家　鱗魚
新築を祝うがようにバラが咲き　和宏
町の子は田舎の家をとび廻わり　亭
家一軒離れたとこへ妻別居　七面山
株買えばすぐにも家が建ちそうに　木魚
蝸牛は良いな君には家がある　どんたく
飯場から飯場へ家のないくらし　芳仙
庭のない団地へ父母は落ちつけず　孜孝
生れたも借家死ぬのも又借家　輝親
家建てる迄はと子等に言い聞かせ　光枝
分家する条件のんだプロポーズ　扇水
借家で生れ団地で定年し　新之助
月賦ではあるが港の見える家　里風
実家へ来て喰べて眠って持ち帰ち　虎城
家建てる夢が大きい共稼ぎ　征山
停年が近く社宅の屋根が洩り　芳仙
一生の汗モルタルの家となる　雅佐女
家屋敷飲んでも酔いがまだ覚めず　誓二
寝ころんで見てしみじみと家のき　不二
焼け太りの家とはひどい事を云う　花秀
住み慣れた家離れるに勇気いり　綾女
新築の間取りで揉める嫁姑　勝子

家建てる希望へ日々を強く生き　秋女
間借りでも愛の家です平和です　芳子
罹災者の家なき家族落ちつかず　道雄
役職を一期つとめて家が建ち　史朗
新日本国旗を立てぬ家もあり　伶人
大ビルの隣の平家意地をはる　白汀
伝説の家へ観光バスが着き　英子
絵はがきの家の空気がおいしそう　古方

佳

住み馴れて家の古さを大事がり　千翁
あばら屋を民生委員驚かし　無閑
日曜をつぶしてボチの家が出来　洋々
働いた金では建たぬ家に住み　利美
なるべくは家には居たくない養子　素身郎

人

新築へガラクタなどの置きどころ　暁風

地

茅ぶきの一棟残る文化財　藤波

天

水害の家へカメラの遠慮せず　英子

軸

家に居て妻は手綱を引きしめる

宣伝

浜田久米雄選

ボーナスがつい宣伝に乗っちまい　暁明
売り上げを見て宣伝の有難味　無閑

柳箋

一冊　六五円
送料　三五円

食べて見て宣伝程でない味覚　里風
儲かればよい宣伝に腹が立ち　弘朗
子供用には子供の声のコマーシャル　初甫
旅の人なのに宣伝ビラを呉れ　宵明
コマーシャル憎らし劇が中断す　肖二
良い品は人が宣伝してくれる　綾女
新聞のちらしが夏を連れて来る　洋々
特売のちらしへ妻がひっかかり　忠志
宣伝へ人のもろさをさらけだし　勝久
宣伝はせずとも売れると家伝薬　泰嗣
宣伝薬を信じ病臥の日日に耐え　磯山
宣伝のビラからスターが笑ゝ呉れ　征山
宣伝の文字がテレビの邪魔をする　恵子
安売りと聞いて奥さん誘い合い　春日
宣伝に乗って物ずき買わされる　暁風
宣伝の割にお客が寄って来ず　軒太楼
宣伝もかねて寄贈の大鏡　英子
コマーシャルソング唄ゝて子が帰り　不二
宣伝費込みの値段で買わされる　輝親
宣伝の花輪喪章をつけて立ち　白汀
何言うて来たのか宣伝カー走り　止水
宣伝カーやっと寝た子を起こし来　秋女
リベートを取ゝ居そうな食い歩記　宇宙太
年頃の娘あり宣伝怠らず　柳子
他所様を宣伝しとく智恵もあり　いわを
美女になりたし宣伝へ人だかり　古心
宣伝のビラ鼻紙にもならず　虎城
コマーシャル通りに強精剤を飲む　史朗
行きずりの宿飽きもせず文よこし　七面山
PRが行き届く頃社がつぶれ

佳

折り込ゝのビラは丸めて捨てられる　千翁
宣伝のようには建たぬマイホーム　思月
成人向映画宣伝ほどでなし　素身郎
宣伝は嫌い暖簾を守りぬき　政夫
医者なんか要らないようなコマーシャル　秋月

人

宣伝はせぬにのれんのありがたく　一二三

地

もっと宣伝しなはれとコンピューター　古方

天

終りまで読んで宣伝だとわかり　藤波

入会のチャンス
9月新学期
初心者歓迎・会費低廉
6ヵ月速成責任指導
毎週水曜・夜7時～9時
大阪市南区大宝寺仲之町1丁目
誓得寺内
TEL (271) 7128
関西奇術教室
顧問　ゼンジー中村

初歩教室

――題「道」――

本田恵二朗

信号がない人生の交差点　止水

信号がないから、ぼんやりとしていられない交差点。そんな交差点が、人生行路にもたしかに在るなと、思い当らされた。一句生みおとすと、その反対的を叙してみると、また一句生れてくるから面白い。そんな手もあることを知っておくと重宝である。

――信号があればと思う生きる道――

残業の妻が近道して戻り　隼人

夫や子らが待っているであろうわが家へ、帰心矢のごとき、妻ごころ、母ごころがいとおしい。愛情が十七音字一ぱいににじんでいる。

道問えば笑くぼを添えて指さされ　聖川

純朴と善意とが、浮き彫りされて、快よい波動が私の心に伝ってくる。こんな小さな善意が、住みよく、明るい世を作る源泉となる。

二十年通うた道でけつまずき　露声

別に油断したわけではなかったのに、どうしたことだろうと、反省してみたら、このけつまずきは、金で買えない良薬となったのだ。

死ぬる気になって展いた芸の道　柳子

プロとしての芸の道は、苛酷なほどの厳しさのあるものと聞いている。華やかなフットライトを浴びて、舞台一杯に踊る姿の裏側には血のにじむ精進があったにちがいない。

川柳街道でも、そのことが言えると思う。

好きな道行けと意見がさじを投げ　美代

東大在学の息子がゲバ棒を振り回すので、私の友人であるその親達が、あの手、この手で説得を計ったが、全く手応えゼロであると、嘆いている。目下さじを投げた姿があわれだ。

初帰省ふるさとの道せまく見え　進

都会生活にどうやら慣れて、久し振りの帰郷はうれしいものだ。都会の広い道を見慣れた目には、里の道が狭く見えるが、なつかしさと安らぎが、身も心も抱きしめてくれる。

一とすじに生きる我が道長い道　富子

長い道だと嘆声の洩れる時もあるが、長いからこそ頑張らねばと思う心に励まされる。

でこぼこの道里が見え家が見え　秋女

少女の頃のままのでこぼこ道を踏みしめる感触は、童心に帰えっている。

木の根っ子前衛華道に拾われる　肖二

近頃はこの木の根っ子みたいな句が、やたらに現れて、喜んでよいのか、嘆いてよいのか迷わされるみたいである。

以上十句を楽しく観賞しているうちに、スペースが、ぐんぐんと縮まって行く。そこで皆さんの力詠を、ずらりと並べて、皆んなで鑑賞することにしよう。

老いの下駄道の小石にあなどられ　濁水

道歩くだけに命を思わされ　繁子

終着へ続く道なり髪染める　一乃字

わが道を行く強情がけつまずき　風仙洞

人生街道損な側ばかり歩かされ　慶彦

貧乏を質に置いても好きな道　利美

茨道もあろう再婚へ力貸し　頼次

相合傘を抜くに抜けない一本道　虎城

ジグザグに出世街道通り抜け　初甫

回り道した半生に残る悔い　誓二

都会のジャングル男孤独の道をゆく　正直

生きる道教えられたり教えたり　生仏

道すがらふける思案はたかが知れ　行有

戦争という道草をくやむ今日　久子

知ってるくせ美人に道を聞いてみる　多幸

嫁姑仲良く平和な道開く　芳はぎの

絶景へでこぼこ道が気にならず　一休

道しるべあわれ葬儀の家を指す　三十四

横道にそれ過ぎ世間狭くなり　比呂路

坂道に来てお喋りがだまりこみ　政夫

子にだけは踏ませたくない過去の道　新之助

画伯いまこの細道に美を見つけ　洋々

それぞれに道あり浮いたり沈んだり　軒太楼

往って参りますとは言わずゆく冥途　静観堂

道連れになったが因果愚痴を聞く　大吉

坂道を押す妻があり六十路行く　秋風

芸道の深さ十年来て判り

里の道歩いてるのに夢覚める　千代
間違った道を教えて追いかける　徹也
近道が寺の厨をふとのぞき　葵水
岐れ道まだ言い出せぬプロポーズ　古平
駐車料取れないかしら家の前　孜孝
回り道借りがあるからとは言わず　愁電子
通らねばならぬこの道ぬかる道　光枝
浄土への道を願ってはずむ布施　一二三
国道が出来て故郷の味うすれ　すき
ハイウエイの車の列を蟻と見る　キサノ
道草を食い食い古稀となりにけり　一登
原爆忌平和への道ほど遠く　綾女
山の道酒の空鑵欠伸する　富士
東海道五十三次三時間　志津

新しい靴へ歩道がやわらかい　為二
山道の汗薫風にいたわられ　秀村
あの方に逢いとうおます回り道　静子
道しるべ昔の旅を偲ばせる　茂美
道遠し雑草如きにあなどられ　啓吉

夏の陽のいたずら歩道の骨を抜く　八重子

こうして教室の顔ぶれが、欠席者無しで、揃うと、ほのぼのとした血の温みが通い合うような気がする。句主の一人一人が、それぞれの味と匂いとを発散させてくれるから一層に愉快である。動物も植物も鉱物も、味と匂いとを持っている。無味無色と言われる水にだって、やっぱり味と匂いとがある。アムストロングとコリンズが足跡をつけた月の土だって味と匂いがあるにちがいない。それらの味と匂いとを感じ取る感度を、文芸に親しむ我々は、養い育てなくてはなるまい。詩情という感度で、万物を感じ取る意気込みがなくてはならぬ。作句に精進することによって、それが為しとげられるであろう。それは人生にとって、素晴しいことだと私は思っている。故路郎先生が『一句を残せ』と言われた。全く名言であるが、遠慮することはない、五句でも、十句でも、も一つ欲張って、百句でも残そうではないか。

★題『祈』九月二十日締切（十一月号発表）
宛先（〒711）倉敷市下津井三五二
本田　恵二朗

大阪文化祭 第21回 川柳大会

日　時　昭和44年11月16日（日）
11時開場・午後0時半開会
会　場　毎日新聞大阪本社講堂

講演　前田　勇氏
兼題　「おんな」　伊東静夢選
「ブーム」　金泉万楽選
「コンピューター」　中島生々庵選
「団　地」　広瀬反省選
「開　通」　堀口塊人選
（当日2題発表）

席題　各題ごとにハガキに2句
投句　住所・郵番・氏名・雅号明記
締切　11月1日着限
宛先　〒530　北区中之島一
大阪市教育委員会内
大阪文化祭川柳大会係

賞　兼・席題の優秀句

主催　大阪府・大阪市・府教委・市教委

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも　心にくい贈物かと存じます
一〇〇円から一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都3店に共通です
大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四　条
高島屋

第二百十八回（四十四年度第八回）

大萬川柳

「午後」

選

今治　宵明

飲むことがおもで開会午後六時　西宮　多久志

午後休診若先生は釣りが好き　島根　芳子

消印有効午後のポストにすべり込み　富田林　きはち

午後からのつとめ近所へ気を使い　大洲　暁明

視察団午後観光に切りかえる　松原　史好

早退で帰れば午睡してる妻　貝塚　つき子

午後からは何をしようか新社員　小松　魚山

監視台赤旗を立て午後の海　岡山　止水

パトカーのサイレン気いる午後を裂き　下関　不水

鍵ッ子は午後の長さへ寝てしまい　和歌山　政夫

午後からの電話デートか長話　岸和田　きさ子

入選発表

者　清水白柳

投句総数　六百五十九句

入選　八十六句

午後からの予報へ夜店荷をほどき　倉敷　千翁

昼食を会議もつれて延びて抜き　堺　青香

午後の部に朝から並ぶ自由席　大阪　弓彦

遠足を流して午後は晴れ上り　八尾　酔々

OLをからかってみる午後三時　大阪　水客

肩の荷をおろし昼飯抜きで寝る　米子　瑞枝

鼻唄で午後のデートの髭を剃り　羽曳野　いわを

会う時はいつものとこでいつも午後　富田林　美代

人を待つ真昼の影も長くなり　倉敷　克枝

くらし負う女に午後の陽が早い　大田　軒太楼

当てにした賃金三時に間に合わず　大阪　双楽

雨の日の飯場の午後は手なぐさみ　笠岡　要次

女教師の乳房が張って痛む午後　岸和田　かつらぎ

午後三時殺したあくびへ出る涙　尼崎　慶彦

朝刊を読み直しする昼下り　米子　千代

鍵ッ子に下校を告げるベルが鳴り　大阪　為二

一分のことで役所の午後を待ち　倉敷　十四雄

午後の陽を背に地蔵さんねむくなり　岐阜　鱗魚

橋一つ越して金魚屋昼になり　大阪　章雅

おはようで通る楽屋の昼下り　倉敷　春日

思惑を後場へ持ち越し機を狙い　豊岡　和久

午後の陽が当る八百屋が売れ残る　鳥取　鎮也

田植えする午後が短い人不足　鳥取　恵子

夏休み午後の陽ざしをもてあまし　鳥取　佳女

長靴へ午後から晴れて気恥かし　鳥取　忠志

午後の陽の砂丘が素足寄せつけず　鳥取　葉舟

午前寝て午後パチンコに出てねばり　高石　好郎

当座からの電話三時に近い声

真夏の午後隣のピアノまだ止めず　松江　鶴丸

時計より正確な子の午後三時

土砂降りの午後マージャンに切り替える　岡山　一声

午後一時開催昼食出さない気

夜明けならんで午後の歌謡ショウ　高槻　静馬

小切手で土曜の午後に支払われ

日曜大工おやつすんだら昼寝なり　富田林　花梢

釣り竿もあくび出てくる午後三時

午後六時てれこに妻が出るつとめ　堺　一二三

油汗午後不渡りの夢で醒め

午後だけのパート買物籠を提げ　倉敷　恵二朗

半どんのお化粧室は手間がいり

午後一時院長只今午睡中　笠岡　忠三

午後からは手持無沙汰になった秘書

ただ今と言うが早いかおやつどこ　大阪　大吉

連休明け疲れを午後の社で憩い

女房にさからい濡れる午後の雨　大阪　あいき

お昼寝のプラン狂わす客が来る

銀行が閉りましたと借りに来る　広島　露声

午後便もやっぱり来ない片思い

ふて寝して午前も午後もない食事　大阪　柳志

五時やでと念を押された十七時
クーボンの宿は西日の当る部屋　大阪　はぎ乃

逢う人の無くても土曜の午後うれし
洗濯を午後に延して雨となり　岡山　久米雄

上役もなにかそわそわしてる午後
月給日午後はなにやらメモへ書き　倉敷　扇水

午後からは粗品めあてでないお客
午後からは雨と見ました値でさばき　堺　天笑

ひまな午後退職金をはじき出し
セールスにノルマ果した午後があり
あみだくじ午後の職場がよみがえる　大阪　形水

注射打つだけの順番午後になり
昼からはプライベートがある社長
銀行の裏口知ってる午後の客　堺　素郎

来る筈の郵便午後も素通りし
影法師ゆっくり午後へ坐りかえ
銀行のシャッター土曜日だったのか
秘書だけが知ってる午後の髭を剃る　佳句　大阪　阿茶

重役は昼食に出てそれっ切り　尼崎　利美

客足がとぎれて遅い昼を食べ
午後三時おやつどころかお茶も出ず　岡山　一声

日帰りはせぬ気午後から里へ行き　鳥取　貴恵

見舞客に午後のながさを救われる　人ノ句　尼崎　利美

受付の午後ははかどるレース編み　地ノ句　倉敷　素身郎

留守番でよかった午後は雨になり　天ノ句　高石　好郎

午後からの微熱妻にも話すまい

選者吟

レール炎えて午後の電車のあえぎけり　大阪　慶之助

大萬川柳四十四年度　第八回
ベストテン（八月現在）

一　柳志　一七、〇　大阪
二　天笑　一六、五　堺
三　瑞枝　一六、〇　米子
四　好郎　一四、五　高石
五　文秋　一三、五　大阪
六　千代　一三、〇　米子
七　水客　一二、五　大阪
八　小路　一二、五　大阪
九　花梢　一二、五　富田林
十　克枝　一二、〇　倉敷
十一　鱗魚　一一、五　岐阜
十二　慶之助　一〇、〇　大阪
十三　素身郎　九、五　倉敷
十四　阿茶　九、五　大阪
十五　里風　九、〇　倉敷
十六　小松園　九、〇　大阪
十七　葵水　八、五　和歌山
十八　利美　八、五　尼崎
十九　形水　八、〇　大阪
二〇　弘生　八、〇　大阪
二一　吸江　八、〇　藤井寺
二二　秋月　八、〇　岡山
二三　鎮也　七、五　鳥取
二四　暁明　七、五　大洲
二五　十四雄　七、〇　倉敷
二六　久米雄　七、〇　岡山
二七　青香　七、〇　堺
二八　素郎　七、〇　堺
二九　一二三　六、五　堺
三〇　史好　六、五　大阪
三一　一声　六、五　岡山
三二　美房　六、五　以下略

前号訂正

横顔もうしろも撮られ晴れ姿―透風は磯山。

昭和四十四年度第十回
姿（すがた）五句以内
締切　九月二十日

第十一回
「断絶」　五句以内
締切　十月二十日

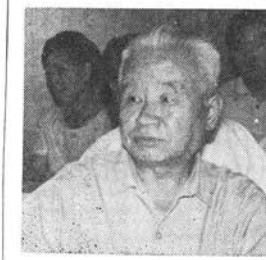
投句先
大阪府高石市高師浜
三丁目五―六　郵便番号五九二
川村好郎

常任理事会

八月四日六時から常任理事会開催。近づく二賞の打合せや大阪の文化祭川柳大会の報告があった。今までは各社から各主幹が顔を揃えたものだが、川柳界もイメージチェンジだ出席―白柳・好郎・多久志・文秋・形水・薫風・静馬・生々庵・柳宏子・一三夫諸氏。

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社
西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二―四
夜間 (762) 四四〇八

柳界展望



路郎忌出席の石原青龍刀氏

担当　橘高薫風

▼麻生馥乃先生から「第三回目のレントゲンにてようやく回復の見通しもつき、薬も服用せずにすみそうです。万代の孫に英語を教えに最近は毎日のように通っていますが、暑さに弱い私はひと苦労です。けれど中学へ行くまでには高校の実力をつけたいと思うています。まだ半病人ですから決して無理はしないで自重はいたします」「吾は海の子泳げる海のない日本」

▼第十三回広島平和祭川柳大会は八月十日午前十時から広島市三篠公民館で開催された。

▼川柳ジャーナル自選作品の募集が静岡市両替町二の二の五川柳ジャーナル事務局からなされている。四十四年度作品自選七句、締切十月十五日、参加料四百円参加者の推薦を集約し、秀句を表彰、住所、所属結社名を明記のこと。

▼川柳宮城野七月号は「皆さんの声（川柳アンケートの結果が掲載されていて、興味深い。「あなたは二十年後の川柳をどう考えますか」の質問に、「川柳は今よりもっとスケールの大きい短文芸の代表格となり、短歌、俳句は将来川柳の一分野となる」という勇しい答もあった。

▼川柳きやり吟社創立五十周年記念句会は明春四月五日（日）に開催される。詳細は追って発表。

▼野口自楽人喜寿並自筆句集出版記念川柳大会は十月十日（祭）正午から東京都新宿区若葉町二の九西念寺で開催。兼題は、衣裳（鞍馬）アルバム（不二也）散歩（右近）推理（薫風）植える（星文洞）流行（紅寿）地位（太郎丸）花道（自楽人）括弧内は選者名、各題三句、投句は百円封入の上九月三十日までに東京都港区新橋二の三の三屋外広告社内、野口自楽人記念川柳大会事務局宛。

▼備前川柳社恒例のうどん祭は七月十九日、兼光浄美居で開催、川柳塔社から川村好郎氏を迎えて盛会だった。翌二十日は閑谷学校、備前焼窯を見学。

▼駒つなぎ川柳会吟行は七月二十八日淡輪へ。新黒崎の露天風呂に参加者はたんのうした。「傷心を磯の香りに抱かれる—美代」

▼石原青竜刀氏（東京都）はふあうすと四十周年の大会、路郎忌句会に出席された際、薫風居で、豊次、冬二、哲郎（片柳）、作二郎静夢、好啓児、俊平諸氏ら中堅作家との会合を「無上の柳縁」と感謝の意を表された。

▼菊沢小松園氏（大阪市同人）は八月一日午後三時から中之島公会堂地下特別室での大阪市民川柳大会打ち合わせ会に出席。

▼東野大八氏（美濃加茂市は七月末、夫人同伴で笠岡市沖合六島へ。途中海上は雨と風に加えての三角波、舟板は落ちて舟腹は鳴り通し、それで昔往行した海賊の小頭ぐらいの気分になり島へ着き二泊、うって変った美しい海での水浴、貝ひろいを楽しまれた。また、大陸同窓会の十一月二日当日は令嬢の結婚式の予定で欠席とのこと。

▼ふあうすと七月臨時増刊号は第十四回全国川柳作家合同句集として昭和四十四年七月二十日発行。参加者千八百三十一名の作品十句ずつが三百頁を越える集大成となった。扉の椙元紋太先生の写真と巻頭言が良い。同じ扉に小文をしたためた「紋太のその感慨はいかが」と結んだ房川素生氏はすでにこの世の人でない。

▼井上旭峯氏（倉敷市同人は七月十九日午後七時三十分岡山大学病院で食道閉塞のため永眠された。行年七十五才。本名井上清心、旧富田村助役を勤められ、遺族は啓子未亡人お一人。たましま川柳会会計、川柳塔社同人として最後まで川柳を作句された。

▼八木摩天郎氏（堺市同人は七月十三日から夫人同伴で東京、平泉中尊寺、鳴子温泉、蔵王山、飯坂温泉、那須高原、伊東温泉と六日間の旅を楽しまれた。「五右エ門じゃないが絶景を云う蔵王」また、堺の川柳散歩、堺古今詩藻集を近く出版されるが、大方の購読をお願い申し上げる。

▼浜田久米雄氏（岡山県同人）は長野県山の内温泉郷上林ホテルで開催された第十三回国鉄川柳人連盟の大会に岡鉄川柳会の十二名の

句碑建立二〇周年記念・第二一回西日本川柳大会！

九月十四日・岡山県久米郡久米南町・（誕生寺）
兼題・平凡・祈る・強気・逆・点・選者・生々庵・ひろし・忠美・新子・紫光—席題選者・三林坊・壬・しのぐ。会費四百円。投句・二百円・九月一日締切　宛先・岡山県久米郡久米南町—**弓削川柳社**。

▼大陸柳人同窓会・十一月二日—会場毎日新聞東京本社会議室—大陸吟十題は九月十五日締切。詳細は姫路市北条二五〇—大井正夫宛

柳友と参加、志賀高原から草津温泉、浅間山を経て軽井沢へ、更に東京へ出て七月十四日朝帰岡された。「二三日下界の暑さから忘れ」

▼麻生アート氏（奈良県同人）は八月九日本年度のバイオリン発表会を大阪上本町八丁目の婦人会館で開催成功裡に無事終了された。「夏痩がひとされ残す土用丑」

▼工藤甲吉氏（弘前市同人）はこの二年間を「青森県人名大事典」（東奥日報創刊八十周年記念出版）に没頭去る四月下旬完成された。それより先、四月一日付けで弘前支社長に赴任、また四月二十日にはピーナツ（双児）のお孫さんが誕生慶事の重なりに転手古舞をしておられる。

▼木村涼人氏（青森県同人）は昨年来胃潰瘍で健康がすぐれず、今も酒を飲めないでおられる。今年の青森の夏はどうも冷え冷えして困りますと。

▼山内静水氏（竹原市同人）から、「一雨ほしい今日この頃です。長崎県に六日間を遊び疲れて帰ると用務山積、忙しい目に会っています。九月の大会のご協力を深謝致します」九月七日の近県川柳大会には大阪から十数名が出席する手筈をしています。

▼山田季賛氏（高槻市同人）は七月十一日夜行で信州へ。全国鉄大会に臨んだあと、志賀高原から軽井沢、高崎、三峰山、長瀞を巡り東京へ。「うぐいすが徐行規制を慰める」

▼国弘半休氏（下関市同人）はかつての雅号の半休門に復号された。国鉄勤務故の転勤で門構えの宿舎に住めぬところから、半休だけで東奔西走しておられたが、下関市の自宅に落ち付かれることになり、再び半休門とされた由。

▼福田丁路氏（高槻市同人）は七月二十七日夫人同伴で西国三十三カ所観音巡拝の振り出しに、東舞鶴郊外の松尾寺へ。京都府下唯一の天然温泉丹後木津温泉で一泊、翌日、天の橋立、相成寺へ向かわれた—与謝の海静かに明けて時雨する。

▼水粉千翁氏（倉敷市同人）は七月八日年一回の京都へ来遊、琵琶湖畔に一泊楽焼などを楽しまれた。比叡、比良の眺めも格別ですがすがしい心をとり戻しました。「葦ゆらぐ雄琴の宿の湖静か」

▼森下愛論氏（東大阪市同人）から、「鳥ケ辻川柳会も会員の栄転により淋しくなって行きます。七月一日から奈良電報電話局庶務課へ転勤を命ぜられました。「往き復り楽な電車にのせられる」

▼宮地双楽氏（大阪市同人）は八月一日神戸からフェリーで小倉港へ。別府見物後阿蘇白雲山荘で一泊、熊本、福岡から、長崎まで足を伸ばしたいと思っています。「近頃は阿蘇おとなしくバスの列」

▼三井酔夢さん（香川県同人）は路郎忌句会の翌日東名高速を突っ走って修善寺泊り。雨に煙る伊豆を下田にぬけて箱根を回遊、河口湖畔で宿をとり、白糸の滝から、さて何処へと、至って気まぐれの自動車旅行を楽しまれた。また、七月二十六日、令息の左眼が急に失明、岡大眼科に入院手術を施行、看護に心痛されている。

▼森本法泉子氏（鳥取市同人）は職場の配置転換、八年越しの夫人の臥床に加えて令嬢の入院と、まさに内憂外患で作句も怠り勝ちですと。

▼橋高薫風は八月九日伊豆熱川温泉へ。下田、石廊崎から、富士見ランド、サボテン公園を巡遊、妻と子供へのサービス旅行を楽しむ。

▼川岡霊眼子氏（諫早同人）は諫早水害殉難慰霊川柳大会の選者として出席。

▼久家代仕男氏（島根同人）は数年前に夫人を亡くされたが六月二十二日再婚。緑之助・明朗・独仙同人諸氏が出席。

▼西尾栞氏と後藤梅志氏は句集刊行の準備中で今から期待が大きい。

▼不二田一三夫氏は七月二十七日、秋田実先生一行と琵琶湖へ水上ドライブに一泊。

▼賛助会員追加26Pに。

新同人紹介

荻野鮫虎狼—久米雄・一声推薦

出原敬一—白柳・生々庵推薦

吉岡遁児—孤呂二・緑之助・推薦

本社八月句会

会場　以和貴荘

七日　午後六時

連日の暑さで出足がにぶってか、この会場へきて、初めての最低記録をつくってしまった。会場は寒いくらいだが、家で寝ころんでテレビを見ているほうが気楽かも知れない。

好郎氏の柳話は、岡山の久米雄氏の句碑建立について恩師をおもう謙虚さや、横山一声氏のご子息が下関の大学へはいったとき、中村九呂平氏が柳縁につながる友情からご子息を自宅から通学させた美談など、正に清涼剤の佳話。――八月の月間賞は名手藤岡花梢さんが本年二回目の栄冠を手にされた。（F）

（河井庸佑整理）

出席＝与呂志・双楽・大吉・新之助・花梢・素郎・肖二・瓢太・古方・静馬・いさむ・トメ子・柳宏子・一三夫・万的・水客・金三・綾女・富久一・誓二・白柳・悦章・静歩・好郎・庸佑・つき子・文秋・一舟・柳志・天笑・千万子・葛城・鶴声・奈良子・形水・儀一・葵水・凡吉・酔々・河産・頂留子・鬼遊・央好・小松園・千里・生々庵・季賛・葉子

席題「冷蔵庫」　清水白柳選

冷蔵庫冷える間のない日曜日　つき子
文化生活という音で冷蔵庫しまる　古方
早く嫁貰えと言ってる冷蔵庫　富久一
冷蔵庫ハム一枚をまた入れた　千万子
冷蔵庫のぞいて献立思い出し　花梢
冷蔵庫あけたらウイロ残ってた　古方
冷蔵庫は空っぽ家族旅行に出かけ　いさむ
冷蔵庫私のプリン早冷えて　千万子
常連へとっときを出す冷蔵庫　好郎
漬物も入れてひとりの冷蔵庫　花梢
冷蔵庫だけが頼りの妻の留守　柳志
冷蔵庫野菜しなびたまま残り　金三
お帰りがこんなに早い冷蔵庫　静歩
ビール出しコーラを入れる夏休み　一三夫
冷蔵庫へもったいないと鉢のまま　頂留子
慶事へはいり切らない冷蔵庫　柳宏子
めざしまで冷蔵庫に入れ独り者　鬼遊
冷蔵庫の中は麦茶のポットだけ　葛城
冷蔵庫に入ってますとそっけなし　葵水
冷蔵庫が閉まった蝿のあわてよう　素郎
冷蔵庫貧しく元気な家と知り　富久一
冷蔵庫お尻でしめて嫁多忙　天笑
裏側でゴキブリはしゃぐ冷蔵庫　静馬
冷蔵庫男は足でしめるもの　古方
顔冷やすのに冷蔵庫子が覗き　儀一
残飯も針になってる冷蔵庫　静歩
犯人はパパとわかった冷蔵庫　素郎
冷蔵庫テレビひとりの旅を独りいる　水客
冷やす間をほしいと冷蔵庫うなってる　千里
児に留守をさす冷蔵庫鍵をかけ　白柳

席題「アベック」　本多柳志選

父と娘とわかって女中敷きなおし　静馬
神妙な顔でアベック闇を出る　柳宏子
アベックのこけしを貯めてまだ一人　葛城
アベックでヌードも覗く宿の下駄　いさむ
アベックは水銀灯が明るすぎ　形水
アベックは痴漢の出そな道を行き　一舟
アベックのムード楽しい歩巾なり　与呂志
みおつくしの鐘へアベック立ち上ぶり　酔々
アベック話題週刊誌を出でず　白柳
アベックの見舞い妬かせたとも知らず　奈良子
アベックの後から歩く阿呆らしさ　葛城
アベックが割勘にして世帯じみ　生々庵
アベックへ値ぶみする様な目が走り　千万子
アベックのどっち噛んだろかと百足　素郎
逆光線アベックの服透けて見え　白柳
ゴール近くなってアベック歩くだけ　悦章
アベックへ無情スピッツ吠え続け　葛城
映画よりロマンスシート気にかかり　酔々
アベックで静の海を飛び歩き　野迷郎
アベックで夫婦ぜんざい食べにゆき　奈良子
アベックとアベック黙ってすれ違い　千里
コトリともさせぬ二人を案じて来　頂留子
アベックで泊る旅館に追手が来　いさむ
アベックで見舞に寄ればお茶も出ず　天笑
アベックで来て坊っちゃんも見直され　柳志

席題「悪友」　戸田古方選

どん底で悪友妻に見直され　富久一
悪友と来て七三の気を使い　葛城
悪友にまた人生を仕込まれる　天笑
悪友が会社に欠かせぬ人となり　肖二
悪友が昨日の首尾を聞きに来る　肖二
悪友も一役買うたこの芝居　誓二
悪友がある日弱音を吐きかける　つき子
悪友に操縦法を伝授され　形水
悪友が病院にまで無心に来　葛城
友較が皆悪友になる落ち目　柳志
父と子と時に悪友めいてくる　葵水
悪友の誘いにやっぱりある魅力　与呂志
悪友にされて詫びまで入れさされ　つき子
ハプニング悪友なりの気を使い　千里
悪友の会費で式を挙げた仲　富久一
お開きとなって悪友寝てしまい　静歩
悪友がだんだん殖えてくる羽振り　素郎

ひとまわり違う悪友と肩を組む　水客
悪友のせいとわが子を信じきり　奈良子
悪友と互いに紹介できる仲　庸佑
悪友としてお叱言の端に坐す　柳宏子
悪友はもちつもたれつ妻だます　一三夫
悪友はよきもの万年平社員　一三夫
下戸一人居って悪友歩がわるい　白柳
ご迷惑でしょうが悪友生き残り　生々庵
お互いに負けたと悪友手を握る　水客
悪友に聞けば結局笑うだけ　季賛
悪友の説教ならば耳を貸し　天笑
悪友と来た旅先で嘘がばれ　いさむ
真実の厳しさ悪友にもこたえ　古方

兼題「他人」　金井文秋選

他人なら言える言葉で励まされ　旅風
いざ金となれば他人の顔になり　一栄
何時までも嫁という目で見つめられ　芳子
ほっとけばよいのに水をさす他人　祥月
まだ他人行儀やんかと女責め　虎城
尾ひれまでつけて他人がかきまわし　千梢
溜息を秘めて他人の目に耐える　扇水
他人だからできる批判を聞いてくる　庸佑
他人行儀な口調で妻の低気圧　柳宏子
何かある他人行儀な今日の妻　花梢
家族以上にしても人手が集らず　一舟
他人の血もらって命拾いする　つき子
意見する親父他人に様をつけ　新之助
あそんでて儲けたように言う他人　静馬
他人事にして古女房うまく妬き　悦章
他人並みの挨拶嫁ぐ瞳もうるむ　儀一
教育ママ他人行儀な子に育て　凡吉
離職して逢えば他人の顔をする　鬼遊
他人ではできぬ看護へ癒え近し　奈良子
幸福を他人の口につぶされる　一三夫
子を貰い他人の口も封じ込み　いさむ
別れろと他人はこともなげに言う　素郎
あらばかり探してこれが他人の目　酔々
そのよさが他人になってからわかり　一三夫
割り切った答他人はずばり言い　綾女
割り切った恋は他人になりすまし　形水
他人から甘くみられた妻でよし　いさむ
他人からみればよっぽど儲けてる　花梢
他人様の笑顔に疲れ妻を恋い　生々庵
義理の仲遂に明かさず老母逝く　野迷路
腹にない言葉で他人子をほめる　文秋

兼題「カーテン」　阿万万的選

カーテンに心ゆるして女脱ぐ　あいき
十五夜がカーテン越しにのぞきこみ　鶴丸
カーテンは妻の好みの新居です　一栄
カーテンを引くだけ婦人科わるびれず　芳子
カーテンにうちの暮しがすけて見え　一栄
カーテンを閉めたがる性開ける質　旅風
カーテンを引いて個室と言う孤独　凡吉
カーテンも変えてわが家の原爆忌　静歩
カーテンを変えて季節を出す芝居　綾女
月に行く世にカーテンが取れぬ国　どんたく
カーテンも揺れず炒りつく蟬時雨　どんたく
準備中とかでカーテンは引いたまま　誓二
引越しの度にカーテン替えされ　つき子
一枚のカーテン娘の居る暮らし　百水
一線をひくカーテンが目に痛し　奈良子
透け透けのカーテンへヒップ大うつし　野迷路
社長室カーテン引いて区切っときぎりぎりの線までカーテン透き通り　千梢
問い詰めてカーテンの色眼に残し　小松園
カーテンで「しきり」勉強室を作る暮し　水客
犯人も人の子カーテン引いてやり　季賛
会議また逆行カーテン閉めに立ち　扇水
カーテンが心もとない寝台車　好郎
カーテンから顔だけ見せて裸の児　白柳
カーテンの調和も渋い貴賓室　綾女
カーテンで区切って心の城とする　金三
カーテンのあちらでチャックあわてる　百水
カーテンを引き女子寮に自由な夜　素郎
五湖めぐり霧のカーテン見て戻り　富久一
カーテンが子の部屋つくる2DK　静馬
カーテンの動きへ映倫はさみ入れ　酔々
看護婦さんきっちりカーテン閉めはった　虎城
カーテンに男やもめのしみがつき　古方
カーテンだけ違い団地の窓同じ　酔々
カーテンを開いて閉じて検診車　文秋
闘病のカーテン変えて夏に入る　奈良子
カーテンもまっ白尼寺静かなり　水客
万的

兼題「出世」　菊田いさむ選

出世コース教育ママと言われても　芳子
出世してほしい門出を祝う膳　正朗
親馬鹿が子の福耳へ期待する　扇水
ところてんの出世定年もう間近か　花秀
子沢山出世しそうなのも混じり　一栄
出世して故郷へレジャー持ってくる　形水
これしきの出世へ母は手を合わせ　一三夫
家庭的過ぎて出世をせぬ夫　肖二
元秘書の妻に出世道教えられ　河産
コンピューター出世コースはよう出まっ　酔々
出世して持つ蝿叩き面白し　水客
出世した道程忘れてそり返り　与呂志
出世する顔でなかった倦怠期　天笑
出世には遠く懸崖咲き乱れ　静歩
出世して長屋総出で見送られ　金三
こつこつと勤め出世を夢みてず　庸佑
栄転の辞令を母は待たず逝き　一舟
出世した噂へ旧友たかりに来　肖二
母の愛こうも尊し立志伝　一三夫
出世頭の友を話題にして飽きず　水客
出世した奴が汚職に名を連ね　柳宏子

糞真面目 出世コースを外ずれてた 野迷路
出世には遠く小金を貯めている 素郎
出世する前はやさしいパパだった 文秋
出世と暮し天ビンにかけ別居する 季賛
出世した夫へ嬉しく不安がり 百水
エリートの出世コースへシゴかれる 柳宏子
出世への近道養子に所望され 万的
番附へ一番出世の虫眼鏡 葛城
出世した証拠に親と別に住み 柳志
ご母堂と言われて嬉し子の出世 誓二
新任は出世コースを行く若さ 形水
出世した親の醜い遺産分け 誓二
出世街道を御曹子として習い いさむ

兼題「伝説」 菊沢小松園 選

照り降りもなく伝説の島豊か 扇水
バスガイドの美声伝説生きて来る 章雅
伝説を神楽囃子にして伝え 正朗
伝説がここに生きてる滝の音 芳子
伝説をほどよく混ぜた旅だより 旅風
伝説のしおりも入れてみやげもの 一栄
伝説をただ伝説と割切る子 鳩丸
伝説の池に大蛇の住んだ嘘 祥月
伝説をガイド最もらしく言い 花秀
月への伝説アポロかきまわし 千梢
伝説を派手に聞かせて観光バス 季賛
伝説より生徒弁当喰べたがり 静馬
伝説はみんな美人にして殺し 万的
伝説の城へエレヴェーターで上り 柳志
伝説は柳の精のおんなげき 生々庵
伝説と嘘とごっちゃにして儲け 好郎
伝説の女哀しく美しく 形水
伝説の地元の人の無表情 新之助
伝説を笑えば老婆の目がけわし 天笑
伝説を観光事業がデッチ上げ 一三夫
伝説の地蔵移転で村がもめ 花梢
伝説がヒント糸口解けてくる 古方
伝説も哀れに平家ガニの甲 万的
伝説の所どころが腑に落ちず 葛城
伝説にリズムをつけてバスガイド どんたく
伝説の寺も赤字で身売りされ いさむ
伝説のマリモ今も生きつづけ つき子
伝説を信じたくなる山の宿 天笑
伝説の湖水は蒼く沈むなり 肖二
アポロ11月の伝説ぶちこわし 文秋
伝説は美しいまま聞いておき 百水
伝説を語る老婆も露にぬれ 水客
伝説にまつわる杉の二たかえ 奈良子
いしぶみに伝説しかと名をとどめ 奈良子
伝説の松は余命のないみどり 花梢
伝説の柳は枯れたままでよし 小松園

堺の川柳散歩と堺古今詩藻集

河盛堺市長序文

八木摩天郎著

さきに「古川柳に詠まれた堺の人々」を著した摩天郎氏が、このほどそのうんちくを傾けて執筆され泉州日報に連載されて好評だった「堺の川柳散歩」と、氏が数十年に亘って蒐集された堺の文人墨客たちの文芸作品を一本にまとめてこのたび上梓されることになった。

著者は現川柳塔社の参事であり、堺川柳作家協会、堺市文化団体連絡協議会の運営などを一手に引き受けて活躍しておられる篤志家である。堺の旧家に生を享けて、若い時代から文芸に趣味があり昭和六年関西日報に和歌を連載して好評を得たので抒情歌集「環境」としてまとめ刊行されているが、その歌集には麻生路郎先生が序文を書いておられるのを見ても、その当時の著者と路郎先生の交友が偲ばれるのである。「堺の川柳散歩」には一般の人達に川柳を知ってもらおうという配慮から、川柳の発生……柳樽等から新川柳にいたるまで詳しく説かれており引例句には堺在住の現川柳家はもとより、堺を詠んだ句の作家を網羅してあるのが特色といえよう。堺を知る上にも是非ご一読をおすすめしたい一書である。

（清水白柳）

★前号訂正

4P上段8行目—**い草植える水照り顔に縞つくる**

6P上段11行目は—**書塾静まり一斉に筆動く**

26P下段6行目は—**原始林心の奥をのぞかれり。**

26P下段8行目は—**老骨が燃えて心のすすむまま。**

58P中段7行目—**藤岡花梢。**

井上旭峯氏逝く

臼井三林坊

川柳社同人井上旭峯さんは七月十九日夜食道癌のため岡山大学病院にて逝去されました。四十一年十月食道の手術をされ、昨年末まで至極お元気で例会へも必ず出席されていたのですが、昨年十二月三十日病気再発。奥さんの献身の看護と柳友の再起の願いも空しく遂に永眠されました。

「川柳たまして」の元老であり、おやじのように慕っていた旭峯さん。旭峯さんの思い出は尽きませんが、一面謹厳の風格は旧富田村助役として、村政を担当されていたせいかも知れません。

一面酒に親しみ酔えば童児のごとくわれわれ若輩と大声にて談論風発、トレイドマークの口髭もとたんに偉厳をなくするありさまでした。

奥様と二人暮しの気易さもあり、毎年観月句会は旭峯さんのお宅が会場となり二十数人の悪友達がどやどや参集、夜を徹して奥様の心尽しの馳走にあずかりながら、作句変じて毒舌会になるのを目を細めて喜ばれ、自分もその雰囲気に浸られていた時が、側で見ていて旭峯さんの一番幸福な瞬間ではないかと思いました。

十八年間糖尿病と闘かわれ、そのうえ不治と言われる癌を併発され、晩年の肉体的精神的苦痛は察してあまりあります。しかし、その苦痛を少しも外部に向けられず、ひたすら川柳作句に情熱を燃やされていました。

死の一ヵ月前まで新聞に投稿されている一事でも知る事ができます。初七日お宅をお訪ねした時、奥様からスクラップブック四冊に几張面に綴じられた新聞の切り抜きを見せていただき、その作句力に一驚致しました。

その他句帳など刻明に記帳されとじ込みの遺品に新らたな涙を流したのであります。川柳をこよなく愛された旭峯さんは今は亡し「川柳たまして」の会計を病いを押して最後まで勤めて頂いた旭峯さん。まだまだ生きて欲しかった。

奥さんは「でも良き柳友と好きな川柳を死ぬまでやって旭峯は倖せです」と述懐されました。

亡くなられた翌朝七ヵ月半ぶりに声なくわが家へ帰られた旭峯さんに、最後のお別れに参った里風千翁と私に、奥さんが見てやって下さいと白布を取られると、目を開けばやーと語りかけそうな旭峯さん、何の苦痛もなくまこと眠るがごとく此処が極楽と言いたげなお顔。黄泉で十九平さんと路郎師の審判で三光（頭光）をきそって下さい。では旭峯さん静かにお休み下さい。

合掌

井上旭峯遺句

座布団の端だけ敷いた低姿勢
ベレー帽昨日の雲が見当らず
ああれが灯台の灯よふる里の
ボタン一つ指先にある分岐点
団欒の茶の間にもある右派と左派
墓地を去る靴音一つ一つ消え
淡き恋上布の袖に風通る
爪を切るまだまだ生きる欲がありつまづいた石が教える自己過信
絶句　裏庭に青空がある車椅子

発地物語

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

南大阪川柳会

金井文秋報

聞き分けて別れると云えば腹が立ち　好郎
チャンスだが不安も一緒についてくる　弓彦
いつか咲く花と辛抱して枯らし　滋雀
金のある方へチャンスも寄って行き　文秋
アイデァを盗む知恵だけもちあわせ　凡九郎
煙が出ないよ情緒のない別れ　白柳
嫁ぐ娘へ父の未練が残る胸　金三
ストリップ見るよな機嫌になりなはん　恒明
また逢えるその日の為にある別れ　智子
アイデァを売り人様を儲けさせ　肖二
迷います標識のない人の道　一栄
袖の下露骨で機嫌ぶちこわし　一舟
人生の迷路を妻に手を引かれ　あいき
ママの留守三日辛抱出来ぬ夫　千梢
解決策決まり迷路を出た心地　綾女
迷路にも似た半生の無駄を悔い　誓二
若社長苦労はせずにチャンス待つ　喜風
きげんのよい証処チップが派手になり　小松園
おもちゃのアイデァパパを喜ばせ　君子
辛抱の汗は未来へはね返り　吸江
手術台痛い辛抱に金が要り　儀一
快心のアイデァ社長と意気合わず　大吉
老妻の機嫌隣りの前も掃き　千代
禁酒して不機嫌そうにめしを食い　静馬
定年まで辛抱する気の社が潰れ　章雅
機嫌とる乳房車中というとれず　庸佑
ご機嫌をそこねたらしい電話口　葵水
歌わして貰うと妻もいいきげん　虎城
世界中のアイデァ万国博に見せ　眉水
辛抱の限界辞表叩きつけ　八郎

玉造川柳会

西出一栄報

少年の夢を飛ばして竹トンボ　静歩
カーネション赤つけられるこを謝し　一舟
夕焼の空母さんを待つ窓辺　伸・吾
中止した筈のタバコをいつか喫い　綾女
スト中止眠い身体を起される　鬼遊
中止でよかった家はその日暮しなり　雀踊子
遠足が中止授業に熱がない　肖二
肝腎の話もよそに笑い声　竹青
弱点をつかれて笑い声涸く　白柳
十八のこなしで見せた笑い声　凡九郎
パスしたなと思う隣りの笑い声　金三
なかなかに去にそうでない笑い声　形水
娘が笑い妻が笑うて引きこまれ　あいき
虚勢張る咽喉がかすれた笑い声　滋雀
養老院笑い声までシワがより　君子
金策がついた電話の笑い声　柳志
笑い声今日は嬉しい腹が減り　六龍子
腹からの笑いがひびくダルマの目　柳宏子
日焼けした飯場に嘘のない笑い　弓彦
顔いがむ程に笑って出る角座　一栄
蝿の身にすれば人間ひどい奴　智子
あやまればひどい奴やですむ話　葵水
ひどい事云うたと和解の手を握る　誓二
ひどい事にならずに済んだ手を合せ　文秋
挽回にじゃま立て誰か糸をひき　句念坊
挽回へ金策つきて蒸発し　章雅
挽回へあの手この手の宣伝部　喆緒
挽回のための喧嘩をわざと売り　虎城
挽回へエリート裸になりきれず　静馬

備前川柳社

目賀芳月報

鍵っ子に夕日が沈むすべり台　胡風
一段ずつ上って停年と言うすべり台　清春
すべり台子供のボスが順を決め　一声
弔問がとだえて父の目に涙　芳月
ほんとうの涙は後からあとから出　正洲
あんまりの悲しさ涙さえわすれ　秋月
涙ふく男こぶしを持ち合せ　浄美
来客に涙のあとを感づかれ　草二
お目出度の席も涙は遠慮せず　三与子
涙見せまいと発つ子の振り向かず　柳子
嫁ぐ娘へ愛の涙は蔭でふき　万女
気の弱い母は涙を先に見せ　伊久野
叱る父より涙の母に負け　飴ン坊
鯉のぼりはたせぬ夢を子にたくし　水仙
反省の時間を酒が消している　久米雄

川柳たましま

水粉千翁報

盲点をつく恋の話術が美しい　秀子
木の芽あえ妻がサラリと帯ねだる　柳子
忘れたいことありハンカチ白く干す　郁恵
角帯をしめて堂島浮き沈み　流風
月きれい話術のうまい子の童話　秀魁
遺言がはんぱ親類割れている　克枝
ゆくゆくは茶の間もほしい2DK　朝二
話術たくみにむなしき世を渡る　三林坊
嘘の話術白いページを繰るように　千翁
飾らない茶の間で愛を打ち明ける　澄子
ハンカチがしみるあの人遠くなる　慶子
偽れる盛装お太鼓から崩れ　里風
どの枝にしようみくじの手が迷う　扇水
半端金うまく使ってことが足り　俊子
さよならを母と見立てた帯がする　幹定

会席の膳が残った日のあせり　皷草
下積の苦労を知らぬ天くだり　麗水

若芽・川柳句会（堺市）　吉岡青香報

友情がぷつんと切れる金を貸し　天笑
夜を徹し式服友の背に直し　一二三
友情がきびしい言葉で叱りつけ　つき子
友情を女同士でしみじみと　志寿
友情をどん底に居て受け取れず　千万子
未練などないが残した子に困り　摩天郎
過ぎ去った思い出未練も薄れゆく　清涼
やけ酒はぐちも未練も聞いてくれ　柳信
イニシャル胸に秘めとく過去の人　茂美
目になれてミニスカートも着て歩け　春子
流行語で反抗親の口ふさぎ　八重子
PTA子に流行を着せたがり　宏子
物置にほこりをあびるフラフープ　左久良
流行につくられた群衆繁華街　耕人
運動会我が子ママも走り出し　美代
応援の弁士の方にわく拍手　青香
応援席子供コーラ飲みたがり　静馬
応援の母は頭を下げるだけ　笑痴
顔だけを見せて応援すぐ帰り　好郎

川柳大阪　児島与呂志報

手に手を取って十八とは顔負けだ　春巣
片意地が野党のように喰いさがり　喜酔
年上の女がもてる唄はやり　洛酔
すぐに又会える人だが拗ねて見る　一乃字
待たしたり待ったり妻とするデート　継之助
ドリンクもその気で飲めば効いたかな　鉄舟
不用意な顔でうどんをすすりあげ　凡々
拗ねて泣く事も女としての武器　孤舟
エリートの職がビラなど受け取らず　秀峰
ラッシュアワー御免と娘の尻も押し　三十四
大部屋の患者同志の愚痴を聞き　茶々坊
自発機もパチンコ並にベルが鳴り　漁人
電話料うなぎ昇りへ娘三人　免月
配転降職人生へ負けていず　季賛
白と黒好きな体位に繰る夏　正則
生活の唄が寝言となる寝言　はじめ
もう母の気持が汲める娘に育ち　誓二
花嫁の三ツ指家風に逆らわず　いさむ
ようやくにあなたと云えた熱海の灯　六竜子
気持もう変ったらしい顔になり　酔升
打解ける気持は有るが父頑固　雅巣
肝心なとこで寝言は聞きとれず　正利
代々の家に花嫁強く生き　笑風
テレビ見ながら心地よい昼寝　与呂志

和気川柳会　岡山県　藤原秋月報

まだ咲かぬ桜の下だけ席があき　秋月
虹の橋歌を残して消えて行き　梅泉
夕食の匂いが露地へ呼びに来る　富士夫
橋へ来て破恋の文を破り棄て　胡風
病院の夕食お日様まだ高い　痒造
桟橋で涙の餞別そっと拭き　芳明
夕食の箸をテレビが吸いつける　艸平
バスガイド橋のいわれも言い添える　繁子
浪人は夕餉の卓に小さく座し　一風楼
夕立ちの置土産にした虹の橋　溪水
夕食もたった一杯太るから　貞子
腕組んでからの橋が短かすぎ　伊久野
夕食に園児がアトラクションを見せ　八竜
橋へ来て見送る母を振り返り　恭子
台風が夕餉に家族みな揃え　康明

むらくも川柳会　藤井明朗報

うっすらと紅をつけてのご返盃　鶏生
盃の置き場にこまる下戸の膳　白汀
盃はよせと言いそう胃が痛み　昌
苗すでに大地に足をつけた色　白汀
苗植えて又出稼の荷をまとめ　鶴丸
温室の花シーズンを忘れたり　みどり
シーズンになって滝茶屋客を待つ　明朗
シーズンオフ知らぬトマトの赤い顔　美栄
若鮎の馳走へシーズン教えられ　孝華
シーズンを過ぎても青葉の土手を恋い　英子
苗植る知事もテレビへ植樹祭　一郎
傘にある屋号でまだまだ通る顔　清夢
湯の街の素足へ似合う蛇の目傘　勇

川柳塔社松江支部　祥月報

あれほどに慕う里子を帰えされず　唖蟬
手拍子と足とそろわぬ踊りの輪　雪美
紫陽花の今日は心に触れる色　泉甫
慕う子を振切って出る共稼ぎ　花子
作風を愛しまだ見ぬ師を慕い　瑞枝
恋にあらねど師を慕う頬を染め　千代
紫陽花の群像七つの色に映え　軒太楼
水引を結ぶ明治の手を借りる　孤呂二
茶の間から手拍手三百六五歩のマーチ　鶴丸
水引簡略ハトロンの御布施　遥児
アパートの玄関狭しとあじさいの投入れ　晃男

玉造川柳会
時　九月十日（水）　六時
題　期待・まさか・（特別宿題）憧れ・
所　玉造交差点南一〇〇米　大阪信用金庫

南大阪川柳会
時　九月二十日（土）　六時
題　抵抗・カラー・見抜く・過信・
所　松崎町二丁目　以和貴荘

富柳会（富田林市）
時　九月二十一日（日）　午後一時
題　ひやかし・針・風・
所　富田林市民館二階　和室—富田林西口駅下　車一〇〇メートル

ゲバ棒へ尻込むばかり　大学教授　天痴人
お手を拝借　三沢あけみの　澄んだ声　祥月

逓信病院川柳会　森下愛論報

鐘の音も京は三方の山ではね　没食子
はりぼての鐘で見得切る道成寺　竹荘
青空の一点アポロは月旅行　夏生
青空へはなして欲しいアドバルーン　落児
円山で遇い京極でも出遇い　晴天
京極のネオンに残る若い夢　草右
大原女は町をはずれて一やすみ　夏生
京極をわざわざ抜けて用を足し　愛論

まるべに川柳会（大阪市）　川村好郎報

宵山の貼紙で知る夏祭節　子
町内は宵山アポロ飛ぼうとも　立児
履きぐせも親そっくりの下駄並び　一世
かつがれたらしい名士の名が並び　茂児
美人だとかつがれてみたいのも女　信代
暗示かけられたようにあつまり詐欺に会い　瓢太
暗示にもかからぬ女小僧たらし　寿子
かつがれたと知ったは金を貸したあと　泉睦
おみこしをかつぐも学生アルバイト　幸子
浴衣がけの祭見物平和の灯　扇里
告示板来たること証拠に書いて去に　星斗
ほんとうに胃癌になった自己暗示　好郎

どんぐり川柳会（羽曳野市）　川村好郎報

灰皿が山になる頃断られ　豆行
うれしい夜仰げば月も又笑顔　馬行
顔中のしわをあつめて母笑う　石倉
断りに行った筈だが引受けた　九鬼
断りの言葉をさがす煙草の輪　豆行
涙腺が涸れて笑顔にもう女　一治
口だけが拒絶体が許してる　酔々
釣り合わぬ縁と下手から断られ　吐来
断りを飾る言葉が見当らず　いわを
いやだとは云えず断るにげ言葉　春風
断られそうな気配にほらを吹き　敏愁
断りを言える余裕で婚期過ぎ　すすむ
神様にも断られたか子無きまま　笑女
ホステスの笑顔自分だけのよう　達也
腕組みを解いて断る顔になり　好郎

どんぐり川柳会（大阪市）　川村好郎報

反省にまぶたつむれば寝てしまい　儀一
反省どころかへりくつ考える　天笑
反省の目もとに妻は安堵する　千万子
訃弁のはらわた煮えくり返ってる　史好
反省へ今宵の鏡澄んでいる　八郎
反省をしみじみ山の青さかな　葉子
負け投手反省会で酔いつぶれ　大庸
つぶらな瞳にじっと見られて反省し　真砂
子の作文ママ反省を促され　痴亭
次の間の反省がもう眠ってる　弥生
反省は男の意地でよう云わず　酔々
反省の色なく女そっぽ向く　比呂路
一杯の酒が反省してくれず　大吉
浪人の反省机に灯をともし　長生
逃げたこと娘チョッピリ反省し　虎声
反省は教会出ればすっと消え　吸江
反省し詫びる心算が先越され　之保
反省のとたん嫁まで世話さされ　喜風
反省会ビール出るから出席す　重夫
云い過ぎた悔がチクチク眠らせる　奈々
酔いさめて反省あほらしさだけ残り　草春
セールスの訃弁善意を買ってくれ　鬼遊
共稼ぎ子の空腹が気にかかり　双楽
空腹を抱えて帰れば女房るす　敏雄
空腹の鍵子一人へ昏れ残る　功雄
くちびるをふるわせて訃弁が手を握る　白柳
反省に両手つかむものがない　小松園
反省をせよと激流まだつづく　好郎

あすなろ川柳会　山本素郎報

責めているから反抗だけ返り　好郎
雨男はずかしくなる程に晴れ　瓢太
しびれてるようにメダカは泳ぎ出し　青香
手枕で明日の口説き文句考える　慶之助
願うこと無いが賽銭入れておき　百酒
母の顔みながら挙げた参観日　ゆきを
大っぴらに好きや好きやと唖同士　素郎

ウイロー社句会（ハワイ）

切端の場妻の頓智で座が和み　カロ女
失敗を妻の頓智で救われる　泉水
子の頓智空巣まんまと捕えられ　拝山
思う事寝言で言うて悟らせる　紅茶
誘惑を頓智でうまく追払い　万里歩
借金とうまく頓智で逃げられる　蒼蛇楼
交通違反頓智でうまく言い逃れ　あき坊
処生訓頓智に混じり湧いて出る　暁舟
してやったつもり頓智の的はずれ　魔花麗
機智に富む嫁で一家が円く行き　エス子
ウィットもとばせる父で若く居る　峯円
一寸した頓智押売追払い　快夢起
頓智ではどうにもならぬ金詰り　紅渓

南海電鉄川柳会（大阪市）　辻圭水報

公害の先手科学は追っ付かず　八郎
公害の恐さ知りつつ職はげむ　清涼
公害が隣の工場引越させ　春子
他人事と思うお人の公害論　宏子
犠牲者が出ねば公害とは云わず　圭水
公害委バケツを下げて来る工場　金三
大和川タボハゼ棲まぬ砂の色　笑痴

和歌山短詩型文学クラブ　垂井葵水報

ミニ娘相性選らぶ古さもち　昭伸
相性も毛並みも難はなかりしに　一光
好きやもん相性なんか言っとれず　三幸

相性を問題にせず技術畑　勝彦
キャバレーで相性論じ他愛なし　不二也
相性の公約数にない二人　葵水
相性が悪いと言えばなおつのり　公作
火の恋へ相性などと他人楼　守夫
相性の小さな活字に動かされ　次章
人人足を忘れて歩いてる　みさお
連休の人出をさけて孤独なり　幸子
シャッター切る人出の波を一寸止め　五月
人出する心斎橋は揺れている　光治
肩の子に方向もきく人出なり　義夫
人出中犬うつむきて通りおり　智恵女
酒に酔わず人に酔うてる春の旅　松子
連休は砂丘も黒き人の波　盛太郎
この人出とんと無沙汰の顔に逢い　政夫
駐車場広く造って人出待つ　冨子
盛り場をさけたところがまた人出　泰彦
新緑の山、海、路と人で埋め　蘇風
叩き売りくもり空みて人出待つ　泰子
人出さけ谷間の宿で夜を明かす　京子
無責任人出眺めに混り込み　太茂津
台風が去った雨戸に朝のかげ　てるよ

畳替え家のやつれがめだち出し　二郎
火花散る恋の敵の目と目なり　幸子
火花散る晴着姿の謝恩会　淳子

川柳たけはら（竹原市）　静水報

友の家初訪問に遠慮する　尚子
進学の帽子鏡に写して見　康宏
小いさな芽春よこいこい歌ってる　千代美

以上、中・高・大生

捨てて来た小猫へ無情の雨となり　十字路
妻だけが頼りこれからこそ夫婦　静水
遠慮なく話せとぐるり囲まれる　静火
用聞きに行けばドラマに座らされ　扇水
草笛が終り両親の影摑まえた　康徳
教え子がツンと女になって来る　迷仏
三拝九拝やっと母を担ぎ出す　孚彦
とろろ澄む炎掬うてみたし掌に　不朽
事故現場カメラ冷たい眼でのぞき　不動
道問えば大阪弁でそっけなし　貞子
茶室からシグナル愚なものに見え　菁居
君の瞳はじっと堪えてる燃えている　浄美
ゆきずりに椿が落ちた日のかげり　政己
風に髪まかせて春とかけくらべ　笑子

母性本能出すだけ出して女なり　延子
妻の目にネオンがこわい路地を抜け　鬼焼
もどかしい自分笑える日のゆとり　文晴
かすかなる期待を胸に瞳を投げる　芳則
僕はハンサム一張羅を着た日から　蘭幸
春の音こぼろこぼろと畦の水　正信
子の遊び近頃ゲバ棒一つ殖え　天石庵

ふじかげ短詩睦会　藤本礎山報

今日もまた元気にやれとたりがなく　国子
よき目醒め朝の空気のうまいこと　勝子
朝毎に希望大きくもちなおし　朱美
母らしい気の配りよう朝の膳　和宏
母植えたバラもひらいて朝の晴れ　恵子
晴れ渡る朝出張の着替えする　和風
痴話喧嘩した朝黙って出る孤心　透風
運転へ朝の気持を大事がり　征山
早起きの朝の空気は俺のもの　忠志
朝着かえさせ初夏晴れへ洗濯す　勝久
夜の邪恋吐き出し朝の顔洗う　葉舟
朝詣で残月に病む娘を祈る　貴恵
家族皆揃った朝の幸に笑む　鎮也
朝みんな送って妻の膳となる　礎山

関戸宗太郎追悼句会

七月十三日午後一時・正雲寺
主催　こまつ柳壇

予期しなかった事は大阪から白柳先生がわざわざお越しになった事である。

宗太郎遺句集は目下奥さんが整理中で最終的には二千句になるように思われるが、彼は十指にあまる吟社や新聞、雑誌、放送にまで投句をしていた健吟家だった。

四十二歳で逝った彼の本職は汽関士（ボイラーマン）だった。趣味としては相撲が好きだったので、題も火や相撲というのが出た。

句会終了後、白柳先生を囲んで今昔の話がはずみ、宗太郎が生きておればと、ことさら惜しくも有意義な集いであった。

これを基盤に「こまつ柳壇」の再建を世話人ともども誓いあった事である。

兼題「火」　伊藤茶仏選

火祭りを伝え青年村に住み　正柳子
火加減も手馴れた児等の目玉焼き　弘美
人間の生活が変る原子の火　魚山
ガスで焼く鰻が父の気にいらず　沐人
火か鉄か熔鉱炉の湯がたぎり　魚山
打水へあぐらのままで火を借られ　白柳
弥陀の灯も電化を許し給うたり　やすえ

兼題「相撲」　山上千太郎選

天覧へ力士の尻が真正面　静古
マゲ剃れば面射し淋しチャンコ店　芳月
三役になって花火で迎えられ　思月
指相撲好きな彼女に組みしかれ　静古
天覧の相撲解説よく喋べり　茶仏
腹減った減ったと相撲部が帰り　路也

席題「便り」　清水　白柳選

またひとり逝った便りへ雲切れず　正柳子
毒舌を便りの中にまで生かし　千太郎
子の便り家族にかくれよみ返し　清子
代筆の無心の便り書く阿呆　冨美子
たまたまの便り欠席する便り　茶仏子
便りには書かず借金足で来る　久子

川柳塔社九月川柳忌句会

日時　9月8日（月）午後六時
会場　以和貴荘
阿倍野区松崎町二丁目
電話622・1275番

兼題
「柳話」　戸田古方
「前借り」　西田柳宏子選
「駅前」　大坂形水選
「指圧」　八木摩天郎選
「ルール」　正本水客選

席題　三題　当日発表　各題三句

会費　二百円

★★投句だけの方は切手五十円封入
電話での投句はご遠慮ください

大阪市南区鰻谷仲之町20
川柳塔社
電話大阪(271)3985番

10月の兼題　「虫」「ラッシュ」「宿命」「幸運」

・ペンペン草・

★九月二十三日は川柳忌である。縁につながるこの川柳の月に朗報がダブルでやってきた。その一は西尾栞氏の還暦自祝の句集と、その二は後藤梅志氏の金婚自祝の句集が近く出版されることである。

★梅志氏から編集最終の日に電話があった。百五十句だけ薫風さんに頼んで、選んでもらっているが、そこへ〝秀句鑑賞〟も入れたいとのこと。〝秀句鑑賞〟は梅志氏が生命を賭けて執筆したものである。ボク自身大多忙なので編集や校正のお手伝いができないことをすまなく思っている。

★校正といえば前号の八月号もボクと印刷所のダブルミスが目立った。

★「柳宴」で斎藤清幸さんが、誤植や送りがなどのふしだらさを書いている。某誌には毎月二百字ほどあるそうだ。送り仮名がなといえば、ウチも相当乱れているが、今のボクには毎月三分の二くらいより書き直す時間がない。

★初校が出たのが二十五日である。これでは誤植防止はダメ。（不二田一三夫）

十一月号発表（9月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵選
近作柳樽（10句）　菊沢小松園選

課題吟（各題5句以内）
「ダンス」　石居高志選
「養子」　磯野与志選
「夕刊」　早川清生選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十二月号発表（10月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵選
近作柳樽（10句）　菊沢小松園選

課題吟（各題5句以内）
「パパ」　水船千翁選
「忘年会」　松下たつみ選
「顔色」　山上千太郎選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳笑をご使用ください。

定価　百四十円（送料六円）
半年分　八百七十円（送料共）
一年分　千六百八十円（送料負担）
昭和四十四年八月二十五日印刷
昭和四十四年九月一日発行

編集兼発行人　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　中島蓬太郎
印刷所　大陽印刷株式会社
郵便番号　五四二
発行所　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　川柳塔社
電話大阪・二七一―三九八五番
振替口座　大阪・三三三六八番

〈朝鮮人蔘〉の効用

二千年以上の伝統をもつ朝鮮人蔘がこの宇宙時代にすぐれた薬として欧米でも再認識されています

〈ヒヤク〉はこの朝鮮人蔘の有効成分をそっくりカプセルにつめた現代人の薬です

●体力を充実させたい方
●疲れがとれにくい方
●貧血・冷え症の方
●老化現象の方
●胃腸の弱い方

朝鮮人蔘エキス

ヒヤク

カプセル

45カプセル・90カプセル・300カプセル

山之内

山之内製薬株式会社
東京日本橋本町2-5

路郎賞・川柳塔賞発表と同人総会！　10月12日

★　同人総会は午後3時から—二賞発表句会は6時から

会場・アベノ以和貴荘階上大広間　・　川柳塔社

料理も電話も　551　ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅　蓬莱　焼売

大阪なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋

堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十四年八月二十五日　印刷
昭和四十四年九月一日発行（毎月一日発行）

川柳塔　九月号

黒潮おどる　紀州路へ

白浜・新宮ゆき＜なんば発時刻＞
急行きのくに2号……（毎日）……7時45分
急行きのくに5号……（毎日）……12時51分
急行きのくに10号……（毎日）……16時40分
夜行直通列車……（毎日）……22時15分
白浜ゆき＜なんば発時刻＞
急行きのくに6号……（土曜）……13時13分
●きのくに5号は座席指定券を　他の列車は座席整理をなんば駅でそれぞれ1週間前から発売いたします

お問合わせ・南海交通社
（641）8686　（341）5038

南海電車

疲労
神経痛は
すぐ
おとり下さい

活性ビタミン複合剤
ハイ・ベストン

全身倦怠・肩こり・腰痛
関節痛・食欲不振・便秘
胃腸機能の減退・疲れ目

5mg・25mg・50mg

高峰秀子

MSC
タナベ

定価　百四十円（送料六円）